

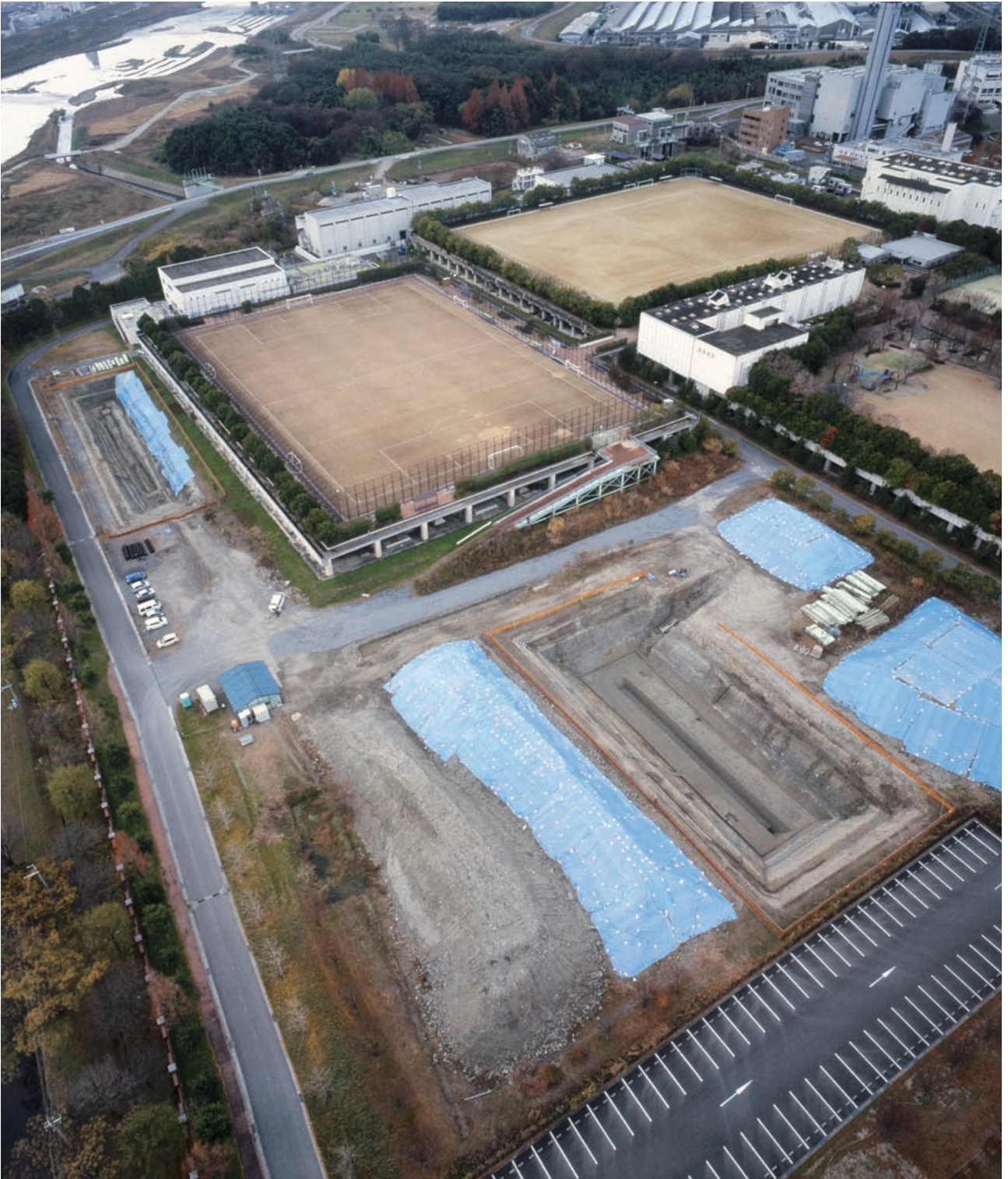
京都府遺跡調査報告集

第162冊

1. 長岡京跡左京第565次 (7ANYSK-2・YHD-2) ・下津城跡
2. 棕ノ木遺跡第11次

2015

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



調査地全景(北東から)



(1) 調査地全景(南東から)



(2) 調査地全景(上が北)

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年4月に設立されて以来、34年間にわたり、府内各地で公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行っています。平成26年度も府内12か所で発掘調査を実施してまいりました。業務の遂行にあたり、皆様方より賜りましたご理解とご協力に厚く感謝申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成25年度に京都府流域下水道事務所の依頼を受けて実施した長岡京跡・下津城跡、椋ノ木遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が、地域の埋蔵文化財への理解と関心を深めるうえで、多くの方々にご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された京都府流域下水道事務所をはじめ、京都府教育委員会、京都市文化市民局、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、精華町教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

(1) 長岡京跡左京第565次(7ANYSK-2・YHD-2)・下津城跡

(2) 椋ノ木遺跡第11次

2. 遺跡の所在地、現地調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	現地調査期間	経費負担者	執筆者
長岡京跡左京第565次・下津城跡	京都府京都市伏見区淀大下津町	平成25年10月16日～平成26年3月18日	京都府流域下水道事務所	石尾政信
椋ノ木遺跡第11次	京都府相楽郡精華町大字下泊小字椋ノ木ほか	平成25年11月6日～平成26年3月4日	京都府流域下水道事務所	村田和弘 中川和哉

3. 上記2遺跡とも平成26年度に本部事務所(向日市寺戸町)で整理・報告作業を実施した。作業については、調査担当者の指示のもと調査課企画調整係が協力して実施した。

4. 本書で使用している座標は、別途記載がない限り世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。

5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

6. 本書の編集は、調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

7. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は調査課企画調整係主査田中彰が行った。

本文目次

1. 長岡京跡左京第565次(7ANYSK-2・YHD-2)・下津城跡発掘調査報告	1
付編：長岡京跡左京第565次調査・下津城跡における放射性炭素年代(AMS測定)	18
2. 棕ノ木遺跡第11次発掘調査報告	21

挿図目次

1. 長岡京跡左京第565次・下津城跡

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図	2
第2図 調査地位置図	3
第3図 トレンチ配置図	5
第4図 1 トレンチ平面図	6
第5図 1 トレンチ西壁土層断面図(1)	7
第6図 1 トレンチ西壁土層断面図(2)	8
第7図 1 トレンチ溝状痕跡平面図	9
第8図 左京第527次調査B地区西壁断面図	10
第9図 2 トレンチ平面図	11
第10図 2 トレンチ東壁土層断面図	12
第11図 出土遺物実測図	15

2. 棕ノ木遺跡第11次

第1図 調査区配置図	23
第2図 調査地及び周辺遺跡分布図	24
第3図 地区割り図	26
第4図 南壁土層断面図	27
第5図 第1面遺構配置図	28
第6図 掘立柱建物S B01平面・断面図	29
第7図 掘立柱建物S B02平面・断面図	30
第8図 掘立柱建物S B04平面・断面図	30
第9図 柵S A03平面・断面図	31

第10図	土坑 S K135・礫敷き S X153平面・断面図	32
第11図	その他の土坑平面・断面図	33
第12図	土坑 S K146・195・201・208・209平面・断面図	34
第13図	土坑 S K242平面・断面図	34
第14図	第2面遺構配置図	36
第15図	土坑 S K300平面・断面図	36
第16図	第3面遺構配置図	37
第17図	土坑 S K400平面・断面図	37
第18図	土坑 S K401平面・断面図、土器集中地点 S X410縄文土器出土状況図	38
第19図	出土遺物実測図1	39
第20図	出土遺物実測図2	40
第21図	出土遺物実測図3	41
第22図	第5・8・11次調査平安時代末～鎌倉時代遺構平面図	43

付 表 目 次

2. 棕ノ木遺跡第11次

付表1	調査次数一覧	22
付表2	棕ノ木遺跡出土土器一覧	45

図 版 目 次

1. 長岡京跡左京第565次・下津城跡

巻頭図版1 調査地全景(北東から)

2. 棕ノ木遺跡第11次

巻頭図版2 (1)調査地全景(南東から)

(2)調査地全景(上が北)

1. 長岡京跡左京第565次・下津城跡

図版第1 (1)1トレンチ全景(空撮、上が東)

(2)2トレンチ全景(空撮、北から)

図版第2 (1)1トレンチ調査前(南から)

- (2) 1 トレンチ作業状況(南から)
- (3) 1 トレンチサブトレンチ溝状痕跡検出状況(東から)
- 図版第3 (1) 1 トレンチ溝状痕跡7・8アゼ断面(南から)
- (2) 1 トレンチ溝状痕跡9・10アゼ断面(南から)
- (3) 1 トレンチ溝状痕跡北部(東から)
- 図版第4 (1) 1 トレンチ溝状痕跡中央部(東から)
- (2) 1 トレンチ溝状痕跡南部(東から)
- (3) 1 トレンチ溝状痕跡南端(東から)
- 図版第5 (1) 1 トレンチ溝状痕跡南端(南から)
- (2) 1 トレンチ溝状痕跡全景(南から)
- (3) 1 トレンチ溝状痕跡全景(北から)
- 図版第6 (1) 1 トレンチ西壁断面(東から)
- (2) 1 トレンチ西壁断面下層(東から)
- (3) 1 トレンチ最下層掘削状況全景(南から)
- 図版第7 (1) 1 トレンチ最下層掘削状況全景(北から)
- (2) 1 トレンチ北東部サブトレンチ断面(南から)
- (3) 2 トレンチ作業状況(南から)
- 図版第8 (1) 2 トレンチ全景(北から)
- (2) 2 トレンチ全景(南から)
- (3) 2 トレンチ東壁断面北部(西から)
- 図版第9 (1) 2 トレンチ東壁断面中央部(西から)
- (2) 2 トレンチ東壁断面南部(西から)
- (3) 2 トレンチ南壁断面(北から)
- 図版第10 (1) 出土遺物(外面・表)
- (2) 出土遺物(内面・裏)

2. 棕ノ木遺跡第11次

- 図版第1 (1) 調査前(西から)
- (2) 第1面検出状況(南西から)
- (3) 南壁土層断面(北から)
- 図版第2 (1) 土坑S K135・礫敷きS X153検出状況(南から)
- (2) 礫敷きS X153全景(南から)
- (3) 礫敷きS X153完掘状況(南から)
- 図版第3 (1) 溝S D110遺物出土状況(南から)
- (2) 土坑S K195遺物出土状況(南東から)

- (3)土坑 S K 201遺物出土状況(東から)
- 図版第 4 (1)土坑 S K 209遺物出土状況(南から)
(2)土坑 S K 146遺物出土状況(東から)
(3)土坑 S X 030半截状況(南から)
- 図版第 5 (1)土坑 S K 144・145遺物出土状況(西から)
(2)土坑 S K 144下層遺物出土状況(西から)
(3)土坑 S K 182遺物出土状況(東から)
- 図版第 6 (1)掘立柱建物 S B 01検出状況(東から)
(2)掘立柱建物 S B 02検出状況(東から)
(3)柵 S A 03、掘立柱建物 S B 01・04検出状況(東から)
- 図版第 7 (1)掘立柱建物 S B 01 柱穴 S P 052半截状況(南から)
(2)掘立柱建物 S B 01 柱穴 S P 077半截状況(南から)
(3)掘立柱建物 S B 01 柱穴 S P 157半截状況(南から)
(4)掘立柱建物 S B 01 柱穴 S P 168半截状況(南から)
(5)掘立柱建物 S B 02 柱穴 S P 202半截状況(南から)
(6)柵 S A 03 柱穴 S P 033半截状況(南から)
(7)柵 S A 03 柱穴 S P 082半截状況(南から)
(8)柵 S A 03 柱穴 S P 124半截状況(南から)
- 図版第 8 (1)第 2 面土坑 S K 300検出状況(南東から)
(2)第 2 面土坑 S K 310検出状況(南西から)
(3)第 2 面全景(南西から)
- 図版第 9 (1)第 3 面土坑 S K 400(東から)
(2)第 3 面土坑 S K 401(東から)
(3)第 3 面全景(南西から)
- 図版第10 出土遺物 1
- 図版第11 出土遺物 2
- 図版第12 出土遺物 3

1. 長岡京跡左京第565次(7ANYSK-2・YHD-2)・下津城跡発掘調査報告

1. はじめに

この調査は、桂川右岸流域下水道幹線管渠工事(雨水南幹線)に伴い、京都府流域下水道事務所の依頼を受けて実施したものである。

調査対象地は、長岡京条坊復原案(新)に従えば、西側を東一坊大路の推定ラインが南北に通り、南側を九条大路の推定ラインが東西に通る地点で、左京九条二坊三町・四町にあたる。また、中世末期の下津氏の居城である下津城跡が推定されている。

洛西浄化センター敷地内では、これまで2回の発掘調査が実施されている。平成20年度に行われた左京第527次(YSK-1)調査では、現代の盛土・整地土の下、標高10m付近に耕作土・床土があり、その下層で中・近世の溝が検出されている^(注1)。平成23年度に行われた左京第547次(YHD-1)調査では、現代の盛土・整地土の下、標高10m付近に耕作土・床土があり、その下に有機物包含層、植物の根株痕跡が確認されている^(注2)。それらの下には一部で砂を含む粘質土がみられるが、概ね粘質土が厚く堆積していた。

これらの調査より、昭和47年からの洛西浄化センターの建設にあたり、地表下に厚さ4～5mの盛土・整地土が堆積していることが明らかとなった。この調査成果を受け、今回の調査トレンチの設定にあたっては、地表下4～5mにある旧表土面までを現代の客土と見做し、委託により、重機による掘削・排土の移動を行った。旧表土面より下は通常の重機の使用であり、調査担当者の立会いの下、慎重に重機掘削を実施して遺構面の検出に努めた。旧表土面での掘削面積は1,200㎡である。周辺の調査では標高8.0～9.0mで遺構が検出されている^(注3)ので、標高8.0mまで安全勾配を保って掘削を行った場合、500㎡の調査面積となるようにトレンチを設定した。

なお、平面図等で使用した座標値は日本測地系国土座標第Ⅵ系で、標高はT.Pである。

調査にあたっては、洛西浄化センター敷地内の北東および南西地区の2か所にトレンチを設定した。1トレンチは左京第547次調査地の南東側に、2トレンチは左京第527次調査地の北側に位置する(第3図)。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会をはじめ京都市文化市民局、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、洛西浄化センターなどの各関係機関にご指導・ご協力をいただいた。また、当調査研究センター増田理事からは調査地の堆積状況等について、地質学の立場から貴重な教示をいただいた^(注4)。

なお、調査に係る経費は、全額京都府流域下水道事務所が負担した。

〔調査体制等〕

平成25年度現地調査

現地調査責任者 調査課長 水谷壽克

調査担当者 調査課調査第2係長 岩松 保

同調査第2係副主査 石尾政信

調査場所 京都市伏見区淀大下津町(洛西浄化センター内)



第1図 調査地及び周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 淀)

- | | | | |
|------------|------------|------------|-------------|
| 1. 下津城跡 | 11. 雲宮遺跡 | 21. 宮脇遺跡 | 31. 水垂築山城跡 |
| 2. 開田城ノ内遺跡 | 12. 棚次遺跡 | 22. 境野古墳群 | 32. 旧淀城跡 |
| 3. 開田城跡 | 13. 水垂遺跡 | 23. 畷遺跡 | 33. 淀城跡 |
| 4. 十三遺跡 | 14. 伊賀寺遺跡 | 24. 松田遺跡 | 34. 木津川河床遺跡 |
| 5. 開田遺跡 | 15. 鞆岡廃寺 | 25. 久保川遺跡 | 35. 長岡京跡 |
| 6. 開田古墳群 | 16. 友岡遺跡 | 26. 金蔵遺跡 | 36. 美豆城跡 |
| 7. 近世勝龍寺城跡 | 17. 野手遺跡 | 27. 百々遺跡 | 37. 泉殿跡 |
| 8. 神足遺跡 | 18. 恵解山古墳 | 28. 算用田遺跡 | 38. 古川城跡 |
| 9. 中世勝龍寺城跡 | 19. 南栗ヶ塚遺跡 | 29. 下植野南遺跡 | |
| 10. 馬場遺跡 | 20. 久保古墳群 | 30. 山崎津跡 | |

現地調査期間 平成25年10月16日～平成26年3月18日(委託埋戻し終了日)

調査面積 500㎡(中間地点1200㎡)

平成26年度整理作業

整理作業責任者 調査課長 石井清司

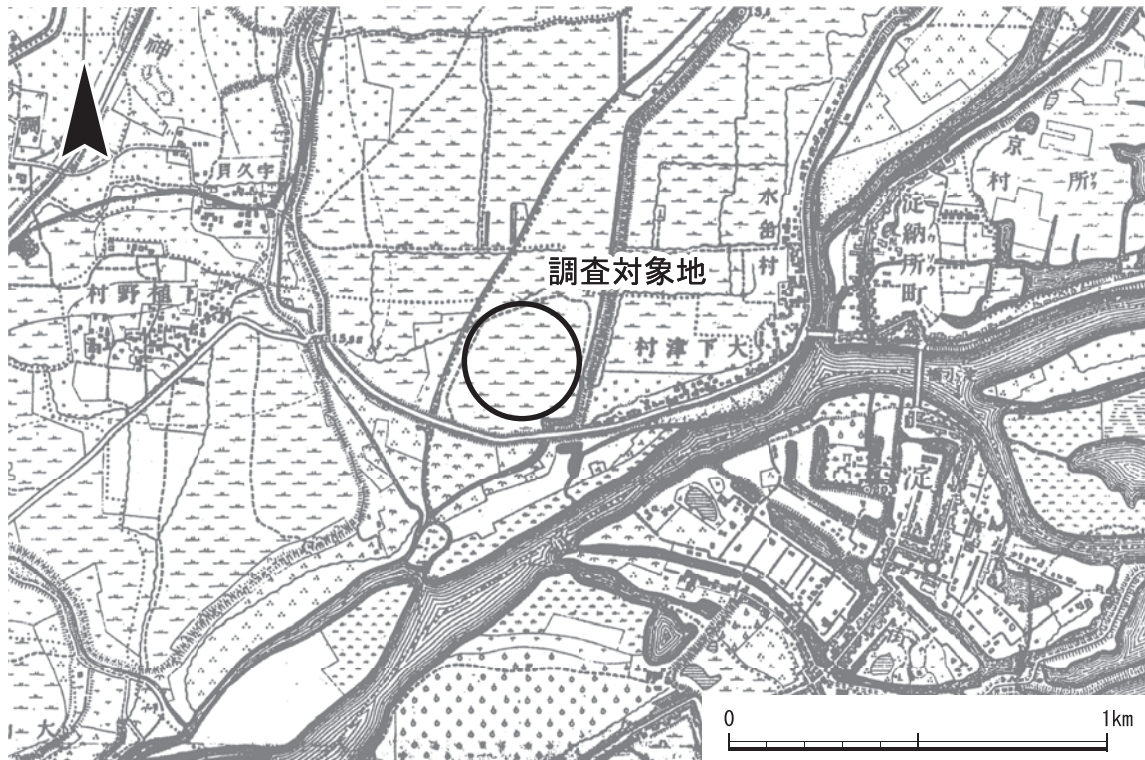
整理作業担当者 調査課課長補佐兼調査第3係長 細川康晴

同調査第3係副主査 石尾政信

2. 位置と環境

下津城跡の周辺の遺跡には、北1kmに弥生時代前期の環濠集落として著名な雲宮遺跡(11)がある。その東に古墳時代の集落跡である水垂遺跡(13)がある。水垂遺跡では長岡京の東二坊大路・六条大路など条坊側溝や建物群などが検出されている。また、東二坊大路と七条条間小路付近を北西から南東方向に流れる川跡が検出されており、川跡から墨書人面土器・土馬・ミニチュアカマドなどの祭祀遺物が大量に出土している。東二坊大路は七条条間南小路付近で途切れている。水垂遺跡の南には水垂築山城跡(31)が推定されている。雲宮遺跡の西側、小畑川右岸には縄文時代から中世の遺跡である神足遺跡(8)、勝龍寺城跡(7・9)などがある。その南方に国指定史跡の恵解山古墳(18)や南栗ヶ塚遺跡(19)があり、さらにその南には境野古墳群(22)・宮脇遺跡(21)・下植野南遺跡(29)・松田遺跡(24)などがある。

『長岡京市史 資料編一』付図2の地形分類によると、神足遺跡・勝龍寺城跡などは北西から南東に延びる段丘先端部付近に位置している。南栗ヶ塚遺跡及び境野古墳群・宮脇遺跡も谷筋を



第2図 調査地位置図(陸軍仮製地図 1/20,000 淀に加筆)

挟んで別の長岡天神西方から連続する、北西から南東に延びる段丘の先端部付近に所在し、恵解山古墳は段丘に近接した氾濫原に位置する。雲宮遺跡・水垂遺跡・下植野南遺跡・松田遺跡などは後背低地に位置している。今回の調査地である下津城跡周辺も、下植野南遺跡・松田遺跡などの遺跡と同じく後背低地に位置しているが、調査地に近接した地域は長岡京跡の範囲に位置しているものの、下津城跡のほかに遺跡は周知されていない。

調査地周辺は、明治20～30年の地図によると桂川と小畑川に挟まれた水田地帯であった。調査地の東隣に七間堀川、西隣に五間堀川が北から南に流れ、桂川へと流れ込む。桂川の左岸には改修された木津川の痕跡が明瞭に残り、この北側には江戸時代の淀城、その東方に宇治川と巨椋池(注5)に関連した小湖沼が点在している(第2図)。

3. 土層と検出遺構

1) 1 トレンチ

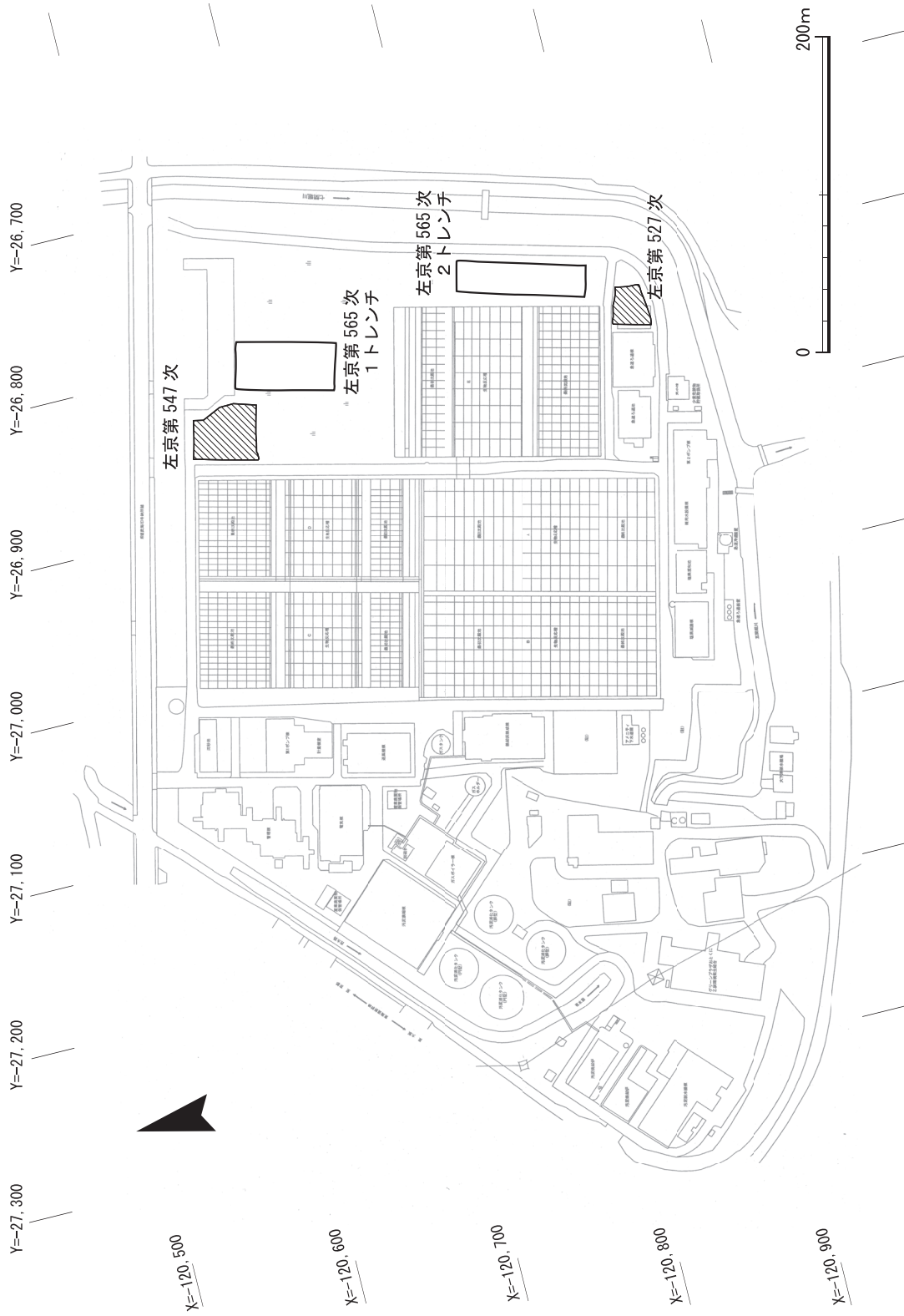
洛西浄化センター敷地内の北東部において、左京第547次調査地の南東側に設定したトレンチである。トレンチの規模は南北63m、東西30mである。地表面の標高は15m前後を測り、現代盛土を約5m掘り下げた標高10m付近で旧耕作土を確認した。旧耕作土以下を遺構・遺物の有無を確認しつつ、標高8m前後の第17層(灰オリーブ砂質土)まで重機により慎重に掘削作業を行った。下面の規模は9m×44m、面積約400㎡であり、この面で精査を繰り返したが、遺構・遺物は確認できなかった。この間には、砂質土・粘質土が水平に堆積している状況が観察できたが、平面・断面の観察を行ったものの遺構・遺物は確認できなかった。

下層の堆積層位や遺構の有無を確認するため、幅3m、長さ40mにわたってサブトレンチを設定して調査を行った。その結果、標高6.8m前後の第28層(灰色粘質土)上面で南北方向の溝状の土色の違いを確認すると共に、瓦器・土師器の小片が出土した。出土遺物とその平面形態より、中世の耕作溝と判断し、それらの溝の性格を明らかにするため、サブトレンチの幅を6mに拡張した。さらに標高6m付近まで掘り下げ、平面的な精査を行ったが(最下層)、遺構は確認できなかった。また、調査区の北東隅で遺構・遺物の有無を確認するため、標高3.2m付近まで重機により土層観察用のトレンチ掘削を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。安全確保のため、図化できたのは標高5m付近までである。

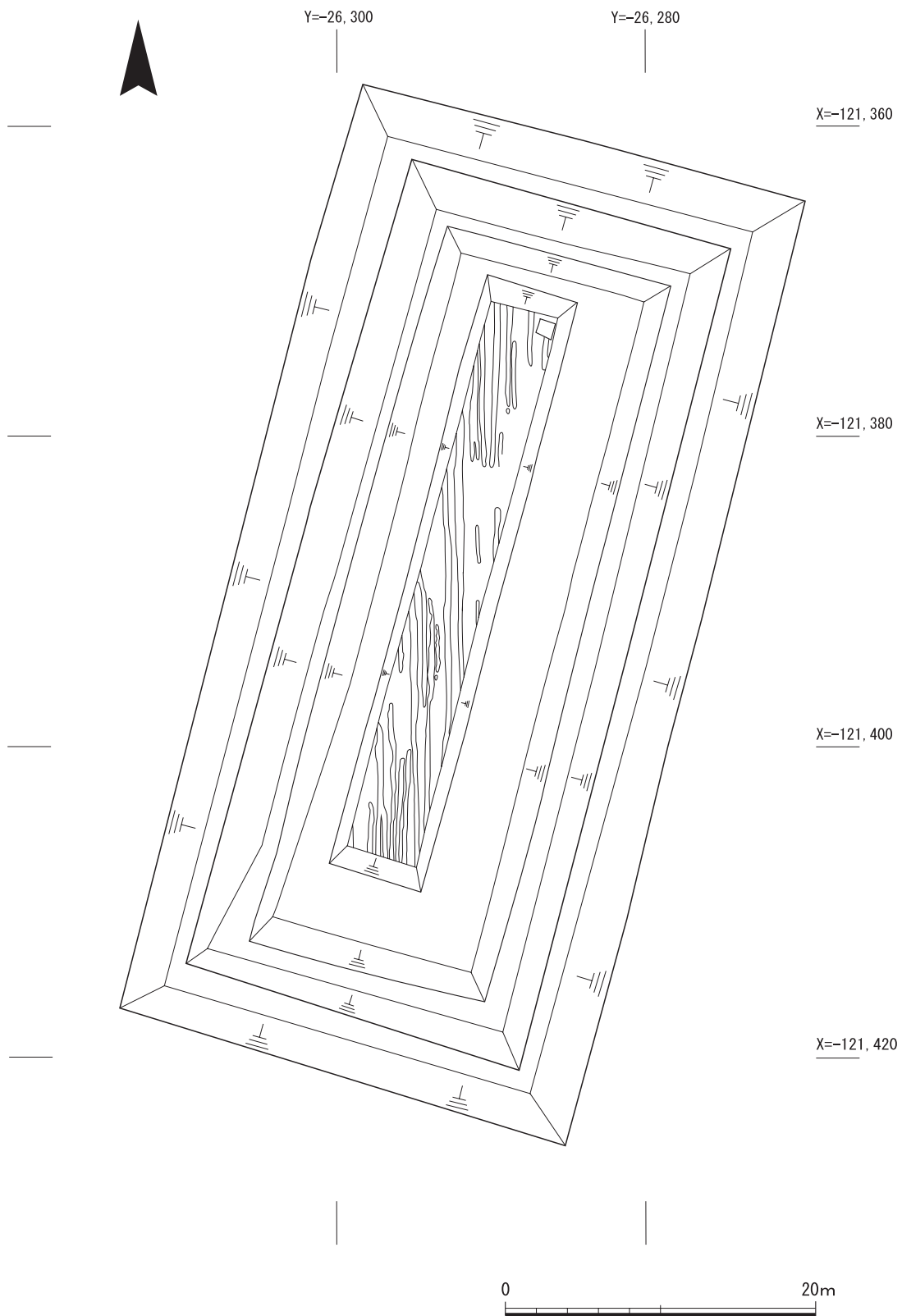
①土層

残存状況の良好な西壁を土層断面図に示した(第5・6図)。現地表面が標高15mで、洛西浄化センター建設時の盛土・整地土が厚さ5m程度あり、浄化センター建設直前の旧耕作土が標高10m付近で観察できる。この旧耕作土より上位の図を割愛した。

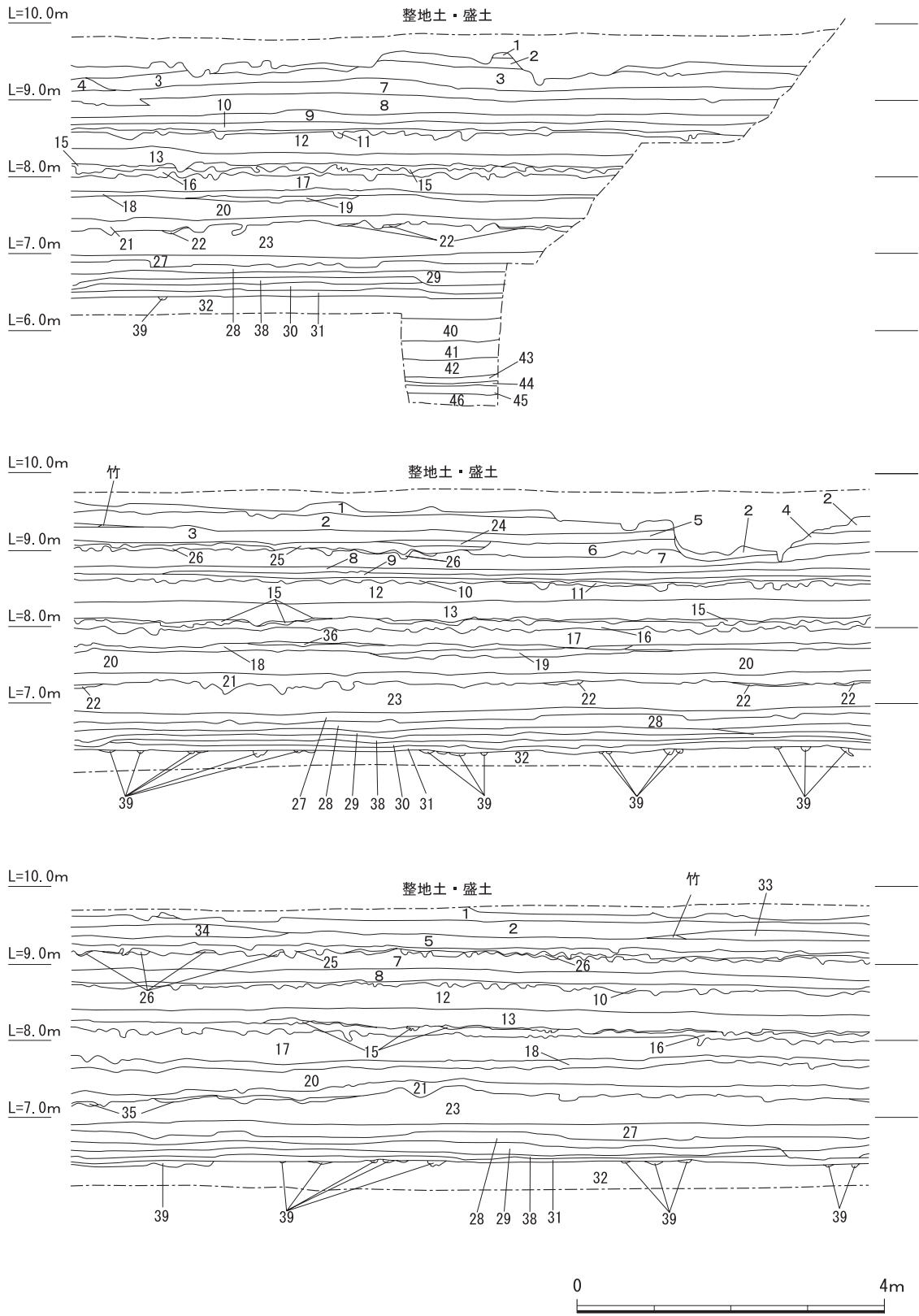
土層観察では、旧耕作土の標高10.0mから標高5m前後の第45層にいたるまで、粘質土・砂層の水平堆積層を確認した。標高6.8m前後の第28層(灰色粘質土)上面で南北方向の溝状の土色の違いを確認し、包含層および溝状痕跡から瓦器・土師器の小片が出土した。標高6.2m付近の第32層(灰オリーブ砂質土)で土師器小片を採集したが、標高6.0m以下では遺物は出土しなかった。



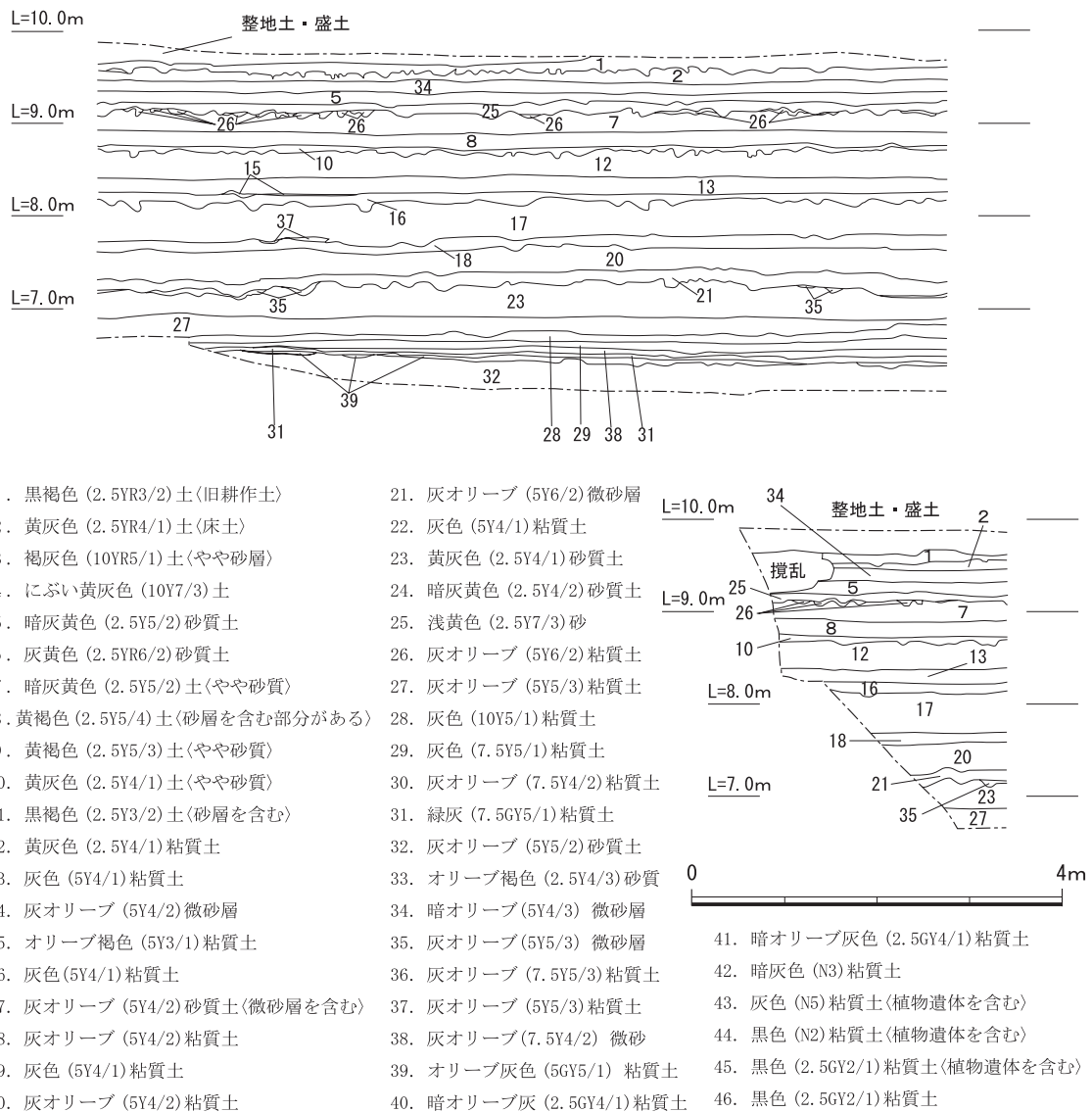
第3図 トレンチ配置図(洛西浄化センター内)



第4図 1 トレンチ平面図



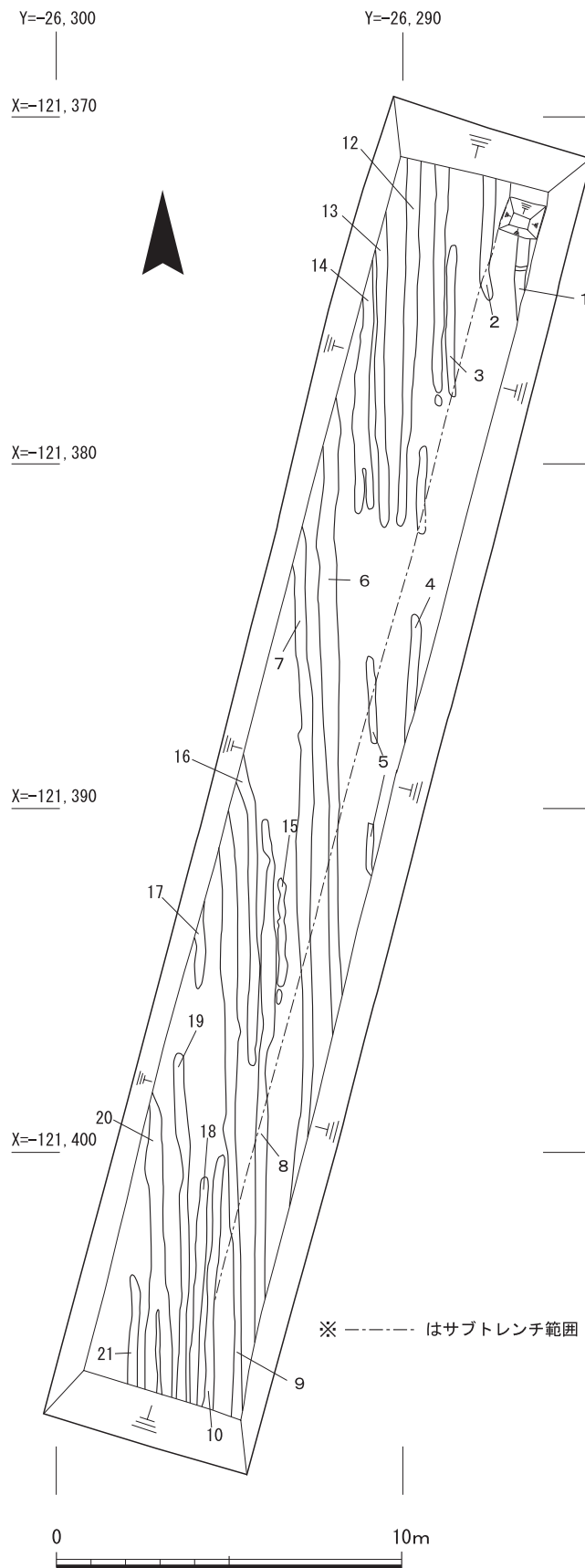
第5図 1 トレンチ西壁土層断面図(1)



第6図 1トレンチ西壁土層断面図(2)

また、調査区の北東隅で、土層観察用トレンチを掘削し観察を行ったところ、標高5m前後に植物遺体を含む灰色粘質土や黒色粘質土が堆積しているのを確認した(第43~45層)。その下層については記録できなかったが、標高3.5m付近まで基本的に砂・粘質土が水平に堆積していた。これらの堆積状況は、水に砂粒が混じらないような沼沢池の河口や汀から十分に離れた場所での堆積環境を示している。通常は細かなシルト質の土壌が堆積するが、洪水などの出水に伴い細かな砂が堆積するような環境下にあったものと推測される。標高3.5m付近では暗灰色系の礫混じりの砂層を確認した。この砂層は厚さ20cm程度の堆積であったが、これより上層に堆積した砂層とは異なり、大きな礫を含んでいることから、安定的な環境下で堆積した砂層であり、河川内における堆積層と推測された。

以上のことから、標高5m付近でこの地点の自然環境は河川から沼沢池へ変化したと推測される。その変化が生じた時期を明らかにするために、第43~45層に含まれる植物遺体の放射性炭素



第7図 1 トレンチ溝状痕跡平面図

測定を業者に委託した。その結果、付編にあるように、¹⁴C年代は1760±20yrBPとなり、暦年較正年代(1σ)は242～326cal ADで、弥生時代後期から古墳時代前期頃に堆積した層であることが判明した。

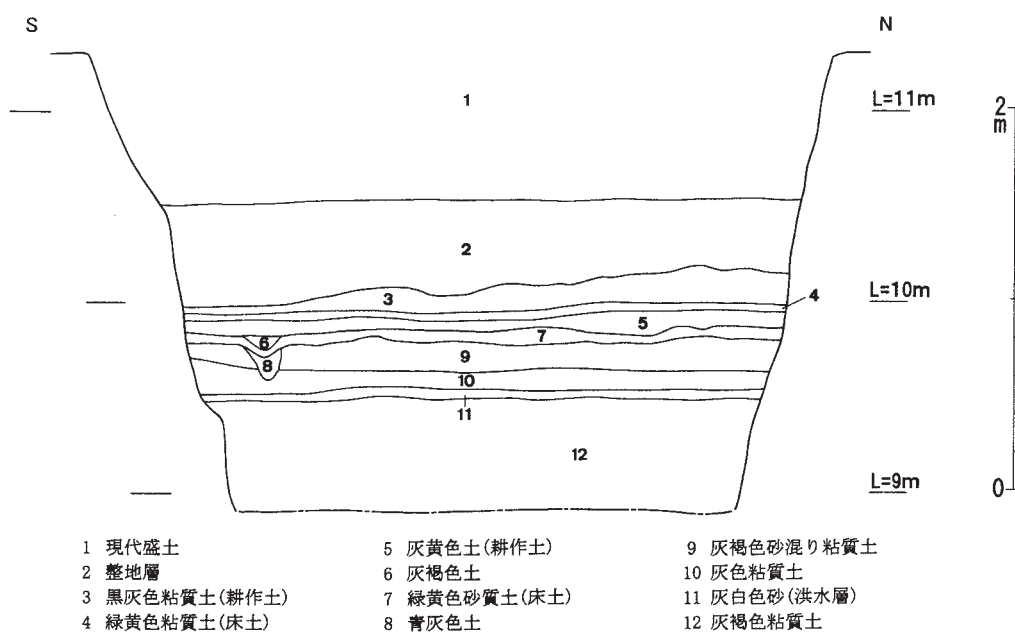
以下の層序の観察では、遺構面は認められなかった。

②溝状痕跡

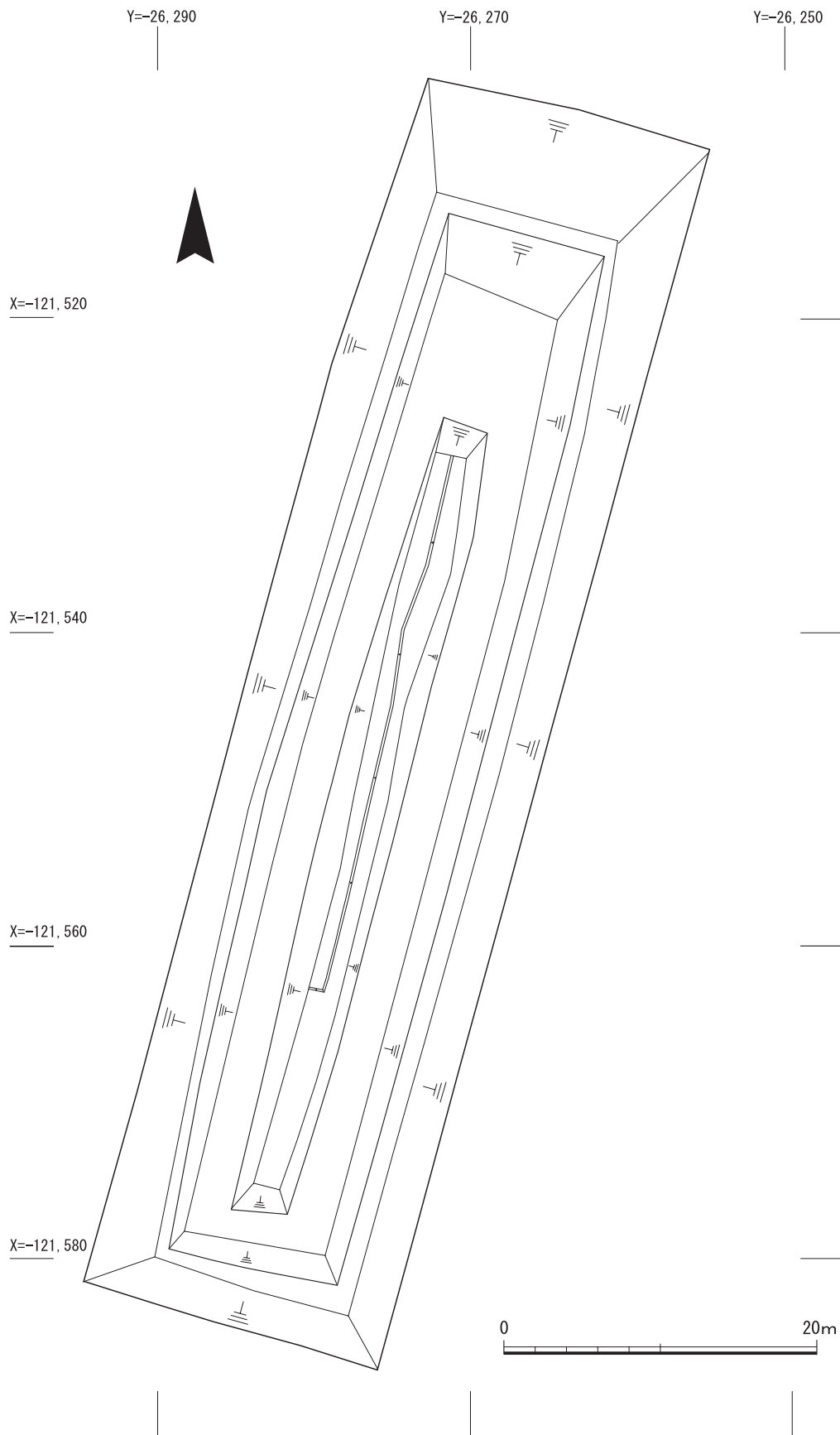
溝状痕跡は南北方向にほぼ直線的に延びるもので、北から南へわずかに傾斜している。断面は皿状を呈し、深いもので5cm程度、幅20～30cm、検出長は最大で19.8mである。これらの溝状痕跡は、途中で二股に分かれるものや消滅するものがあり、溝々の間隔も粗密があった。中央部では残存状況が悪いためかややまばらで、北部・南部では密度が高く、ほぼ同じ密度で近接して検出された。溝状痕跡内からは土師器・瓦器の小片が出土した(第11図1・2・4・7)が、溝状痕跡の検出面からも土師器・瓦器片などが出土している(第11図3・5・6・8～11・13)。現地直接指導いただいた増田理事から、これらの溝状痕跡は人工的なものではなく、沼沢池の底面を横方向に急激に水が渦を巻きながら流れた際に、筋状に抉り取られた窪みに別の土が堆積したものととの教示を得た。出土した遺物は、通常とは違った急激な水の流れとともに流入した遺物が水底に堆積し、急な渦巻き状の水の流れにより、沼沢地の底面が抉られた際に巻き上げられ、再堆積したものと判断する。

2) 2 トレンチ

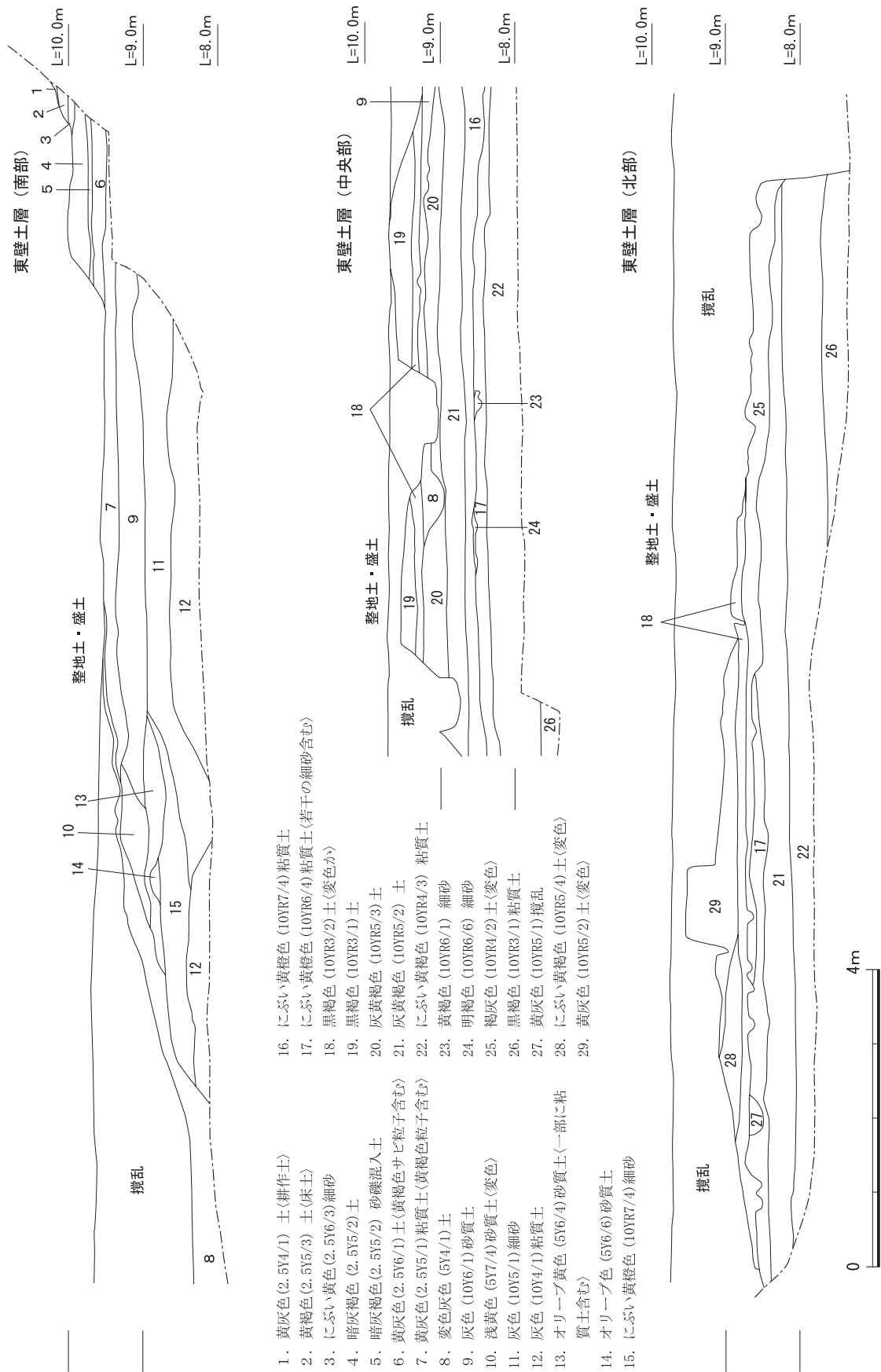
洛西浄化センター敷地内の南東部、平成20年度に調査を実施した左京第527次調査の北側で調査を実施した。



第8図 左京第527次調査B地区西壁断面図
(松井 2009 第2図を転載)



第9図 2トレンチ平面図



第10図 2トレンチ東壁土層断面図

左京第527次調査では、旧耕作土以下、灰褐色粘質土までの10層を確認している(第8図)。このうち、標高9.8m付近の第5層(灰黄色土)の下で溝1条、第9層の灰褐色砂混じり粘質土の上面にあたる標高9.7m付近で、幅約0.2m、深さ0.2~0.3mの溝1条を検出している。溝内からは遺物の出土はなく、前者は近世、後者は中世の所産と推定されているものの、正確な時期は不明である。

調査地は、東側に浄化センター敷地内の通路があり、西側に浄化槽建物が近接してあることから、安全確保に留意してトレンチを設定した。トレンチの上端での規模は、南北80m、東西19.5mで、現地表面での標高は、西側で14m前後である。既存建物と道路の間に十分な余剰帯を設けたため、トレンチの東西方向を十分に確保することができず、安全勾配を確保しつつ約6m掘り下げた標高8m付近では、幅約2mしか調査できなかった。そのため、これより下層は平面的に掘り下げることができず、サブトレンチによる土層観察を行っただけである。この標高における調査区の面積は50m×2m、100㎡である。

調査に際しては、左京第527次調査を参考に、現代の盛土・整地土部分を厚さ約4mにわたって重機で除去したところ、旧耕作土を確認した。旧耕作土・床土は標高10m付近で確認したが、これらは西側の既存建物の建設に伴いほとんどが攪乱を受けており、調査トレンチの南端に約4m程度が残るだけであった。

①土層

第10図は東壁の土層図である。東壁南部の層序は、耕作土(第1層)、床土(第2層)があり、その下に、にぶい黄色細砂(第3層)、暗灰褐色土(第4層)、暗灰褐色砂礫混入土(第5層)、黄灰色土(第6層)が堆積している。これら第1~6層の北半は攪乱を受けており、調査区の南端で確認しただけである。これらは旧耕作土と旧床土にあると推定される。左京527次調査で中世と推定された溝およびそれに関する遺構を、標高9.5m付近、黄灰色土(第6層)と黄灰色粘質土(第7層)で検出に努めたが、遺構は検出できなかった。この後、標高8m付近まで掘り下げて土層を観察し、遺構・遺物の検出に努めた。下層には、灰色砂質土(第9層)、灰色細砂(第11層)、灰色粘質土(第12層)が堆積している。第11層から陶磁器が1点出土した(図版第10 出土遺物a)が、小片であるため、時期については不明である。

中央部では、整地土・盛土の下で南端の標高9m付近で見られた灰色砂質土(第9層)が薄く堆積するが、その下には灰色細砂(第11層)がなく、これより下のにぶい黄橙色粘質土(第16層)と若干の細砂を含むにぶい黄橙色粘質土(第17層)があり、これらの土層の間に黄褐色細砂(第23層)、明褐色細砂(第24層)がわずかに堆積していた。これらは、第16・17層が堆積する途中に流入したもので、遺構に関連するものではないと判断した。

北部では、中央部から続くと推測できる若干の細砂層を含むにぶい黄橙色粘質土(第17層)の下に、灰黄褐色土(第21層)、にぶい黄褐色粘質土(第22層)が堆積している。砂質土・砂層は確認していない。また、堆積層から遺物は出土しなかった。

南部と中央部で土層観察用のサブトレンチを設定して、下層の層序を観察したが、遺構面は確

認できず、南部の黒褐色粘質土(第26層)から土師器小片が出土した。時期は不明である。

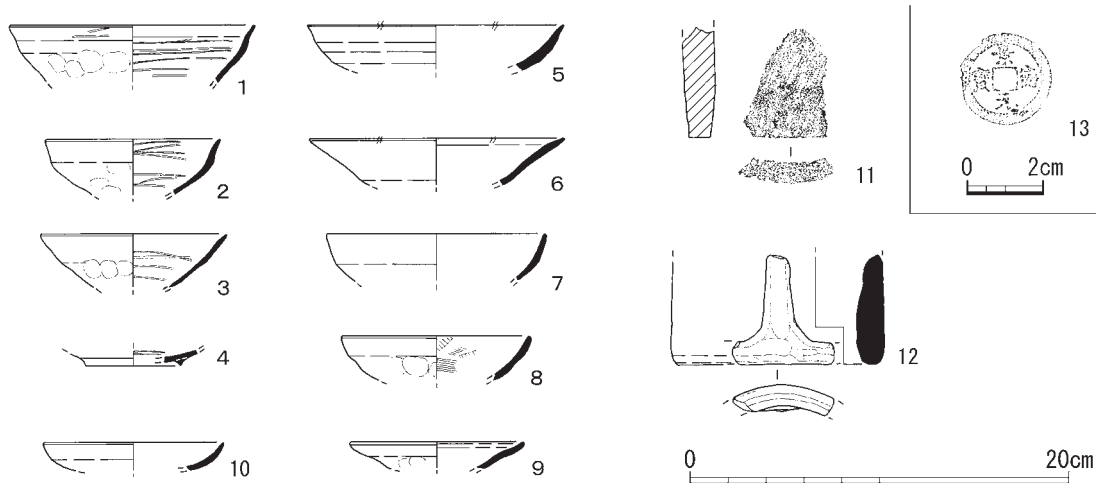
以上のように、標高7.4mにいたるまで平面的な精査を行い、土層観察を繰り返したが、遺構面を確認することはできなかった。

4. 出土遺物

出土遺物は主に1トレンチの溝状痕跡を検出した標高6.8m前後、第28層から出土した。出土遺物には土師器・瓦器や青磁、桃の種子(図版第10)などがあり、その上層からも陶磁器・土師器・瓦器・土製品・瓦・木片が少量出土した。第28層よりも下の層序で数点の土師器が出土したが、標高6m以下では土器類は出土しなかった。いずれも小片で形態・法量がわかるものはほとんどなく、実測可能なものを図示した。出土した量は遺物整理箱に1箱である。

溝状痕跡出土遺物(第11図1・2・4・7) 1は溝状痕跡11から出土した瓦器碗である。復元口径12.8cm、残存高3.1cmを測る。焼成は良好で、胎土に白色・半透明の粒子を含む。色調は外面が灰色～暗灰色で、断面は灰色を呈す。調整は、口縁部外面の上部をヨコナデし、口縁部内面に粗いミガキを施す。外面に指頭圧痕が残る。2は溝状痕跡8から出土した瓦器碗である。復元口径9.1cm、残存高3.0cmを測る。焼成は良好で胎土は密で白色・半透明の粒子を含む。色調は外面が暗灰色で、断面は灰白色を呈す。口縁部がわずかに屈曲し、端部を丸くおさめる。口縁部外面上部をヨコナデし、口縁部内面に粗いミガキを施す。外面には指頭圧痕がみられる。4は溝状痕跡5から出土した瓦器碗である。復元高台径5.0cm、残存高0.9cmを測る。底部外面に断面三角形の高台を貼り付ける。焼成はやや甘く、胎土は密で白色・灰色粒子を含む。7は溝状痕跡9から出土した土師器皿である。復元口径11.5cm、残存高2.5cmを測る。焼成はやや軟質で、胎土は密で白色・灰色粒子を含む。色調は灰白色を呈す。残存状況が悪く、調整などは不明瞭である。

包含層出土遺物(第11図3・5・6・8～13) 12を除き第28層から出土した。3は瓦器碗である。復元口径9.1cm、残存高2.8cmを測る。焼成は良好で、胎土に半透明の粒子・黒色粒子を含む。口縁部は直線的に延び、口縁部外面上部をヨコナデし、口縁部内面に粗いミガキを施す。外面には指頭圧痕がみられる。5は土師器皿である。復元口径13.4cm、残存高2.4cmを測る。焼成は軟質で、胎土は密である。色調は外面が橙色で、内面は明褐灰色を呈す。口縁部はヨコナデする。6は土師器皿である。復元口径13.3cm、残存高2.5cmを測る。焼成は軟質で、胎土は密で白色・淡褐色の粒子を含む。色調はにぶい橙色を呈す。口縁部は外上方に広がり、端部をわずかに引き上げる。上部をヨコナデし、外面に指頭圧痕が残る。8は土師器皿である。復元口径9.8cm、残存高2.4cmを測る。焼成は良好で胎土はやや粗く暗茶褐色の粒子を含む。色調はにぶい黄褐色～灰白色を呈す。口縁端部をヨコナデし、外面に指頭圧痕が残る。口縁部内面の一部にハケ目が残り、全体にヨコナデを施す。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。9は土師器皿である。復元口径9.1cm、残存高1.5cmを測る。焼成は良好で、胎土は密で褐色・白色粒子を含む。色調は外面が灰黄褐色、内面はにぶい黄橙色を呈す。10は土師器皿である。復元口径



第11図 出土遺物実測図

1～4：瓦器碗 5～10：土師器皿 11：瓦 12：土製品 13：景德元寶

9.4cm、残存高1.5cmを測る。焼成は良好で、胎土はやや軟質で、白色や赤褐色・半透明の粒子を含む。色調はにぶい黄橙色を呈す。11は平瓦である。凹面に布目がみられ、端部にはヘラケズリを施す。凸面はナデている。焼成は良好で、胎土は密で1～1.5mmの黒色粒子と1mm以下の白色粒子を含む。色調は灰白色を呈す。13は景德元寶である。直径2.4cmを測る。中国・北宋時代のもので、初鑄は1004年である。

12は第20・21層から出土した土製品である。円弧状の粘土塊に直交して粘土柱を取り付ける。外面にはナデとケズリが見られる。円弧状の部分は最大復元径11.2cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調は灰白色・橙色を呈す。土製の五徳と推定される。

溝状痕跡やその周辺から出土した遺物の時期は、瓦器碗の特徴から13世紀後半～14世紀と推定される。土師器も同様の時期であろう。平瓦は凹面の布目や調整の状況から概ね平安時代と推定される。五徳と推定される土製品は類例が少ないので時期は不明である。細片のため図示できなかったが、他に13～14世紀の青磁片も出土している。

5. まとめ

今回の洛西浄化センター内における長岡京跡・下津城跡の調査では、溝状の色調・土質の違いを検出した。まず、この溝群について検討したい。

1トレンチ下層の標高6.8m付近で、溝状痕跡を検出した。これらについては、当初、中世素掘り溝と認識して調査を進めた。しかし、溝状痕跡には途中で二股に分かれるものや消滅するものがあること、北から南に向けて一定の深さで掘られていないため部分的に途切れること、溝と溝との間隔がほぼ一定であること、中世素掘り溝は長年にわたって同じ位置に溝が掘り直されるため溝群が一定の幅に集中する場合があるが今回のものはそうでないこと、いずれも断面が皿状を呈して深いものでも5cm程度しかないこと、埋土とベースとの境界が不明瞭であることなど、違和感を感じる点が多々あった。また、南山城地域の桂川・淀川流域の弥生時代から桃山時代に

おける遺構の検出高は標高約8.0～9.0mであることが指摘されており、今回の溝状痕跡を検出し^(注6)た標高6.8mという高さは周辺の検出遺構面よりもかなり低いもので、河川や湖沼池などの水面よりも低くなる可能性も想定された。

これらについて検討したところ、溝状痕跡は人工的なものではなく、沼沢地に洪水などの際に急流が流れ込み、その水流が沼沢地の底面を渦を巻きながら抉った痕跡であると推定した。そして、溝状痕跡および第28層から出土した遺物はいずれも中世(13世紀後半～14世紀)のものであるが、これらの遺物は小片であるが摩滅がひどくないことから、さほど遠くから運び込まれたものではなく、沼沢地の汀に近い水底にあったものと推測される。このように、これらの溝状痕跡は人工的なものではなく、沼沢地の底に堆積したものと推定される。河川の分布から、現調査地周辺は小畑川と東側の桂川に挟まれた遊水地であったと推定され、溝状に抉られた方向から、北側にある小畑川から水が流入したものと推定できる。

今回の出土遺物や溝状痕跡が、上述のような経緯で形成されたとするならば、流れ込む方向である北方向に13世紀後半から14世紀の時点で生活が営まれた可能性が想定される。もしくは湖沼の中央付近に位置する中洲上で生活が営まれ、そこから遺物が流れ込んだ可能性も想定できる。これらが下津城跡に関連して流入したものであるかどうかについては、今回の調査では判断できない。

さらに、これまでよくわからなかった環境の変遷についても一つの知見を得ることができた。今回の調査では、標高6.8mで13世紀後半から14世紀の遺物が出土し、それより上位はシルト質の土壌が堆積しているため、今回の調査地周辺の環境は、少なくとも中世以降、流れのほとんど無い、汀からかなり離れたところの水中に位置していたと判断できる。

また、1トレンチのサブトレンチ内の5m付近で検出した植物遺体を放射性炭素年代測定(AMS測定)により分析したところ、暦年較正年代が264～326calADとなり、弥生時代後期から古墳時代前期に相当することが判明した。この下の標高3.5m付近では河川堆積と判断される砂層が堆積しており、堆積物の違いから、河川内から沼沢地内へと環境が変化したことがわかる。放射性炭素の年代測定により、少なくとも弥生時代後期から古墳時代前期までには沼沢地へと変わり、以後近代近くまで、同様の環境の中にこの地があったものと推測される。

細かく見ると、弥生時代後期から古墳時代前期以降中世までの約1,000年間にわたって、約1.8mの土砂の堆積があったのに対して、中世以降近代近くまでの約700年間では、約3mの土砂の堆積があったことになる。大きな環境の変化があったことが窺える資料を得たといえる。

洛西浄化センター全体に4m前後の整地・盛土が行われているため、地形の変化が著しく現況から下津城跡の痕跡は見当たらない。東側の七軒堀川が洛西浄化センターの南で西に屈曲した後、そこから桂川に向かって流れている。これが北から南下した七間堀川と五間堀川に挟まれた方形状にみえるため、堀で囲まれた屋敷地または城跡と推定される要因とも考えられるが、これまでの洛西浄化センター発掘調査で城跡と積極的に支持する資料を得ていない。付近の明治初期の地形図にも明瞭な痕跡を確認することができない。今回の調査では、この付近は少なくとも弥生時

代後期から古墳時代前期以降近代にいたるまで、小畑川と東側の桂川に挟まれた遊水地として機能しており、大量の砂質土・粘質土などが繰り返し堆積したことがわかる貴重な調査成果を得ることができた。

(石尾政信)

- 注 1 松井忠春「長岡京跡左京第527次(7ANYSK-1地区)発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第132冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
- 注 2 田代 弘「長岡京跡左京第547次(7ANYHD-1地区)発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第149冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2012
- 注 3 吉崎 伸「長岡京の廢都と巨椋池について」(『長岡京古文化論叢』Ⅱ 中山修一先生喜寿記念事業会編) 1991
- 注 4 以下、地質における専門的な知見は、増田富士雄同志社大学教授のご教授によるものである
- 注 5 『京阪地方仮製式萬分巻地形図』 京都近傍17面組 明治17年～22年測図 参謀本部陸軍部測量局 大日本測量(株)資料調査部複製
- 注 6 注 3 文献

付編

長岡京跡左京第565次調査・下津城跡における放射性炭素年代
(AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

長岡京跡左京第565次調査・下津城跡は、京都府京都市伏見区淀大下津町に所在する。測定対象試料は、腐食土中より採取した炭化物1点である(表1)。

この腐食土は、土師器片が出土する地点より下位(標高5m付近)に堆積している。

2 測定の意義

試料が属する層の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を使い、OxCal v4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

試料 1 の ^{14}C 年代は $1760 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は $242 \sim 326\text{cal AD}$ の間に 2 つの範囲で示され、弥生時代後期から古墳時代前期頃に相当する (小林 2009、佐原 2005)。

なお、試料 1 が含まれる 1~3 世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾寄 2009、坂本 2010 など)。その日本版較正曲線を用いてこの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age yrBP	pMC (%)
IAAA-141389	1	堆積層	炭化物	AAA	-9.80 ± 0.55	$1,760 \pm 20$	80.31 ± 0.25

[#6850]

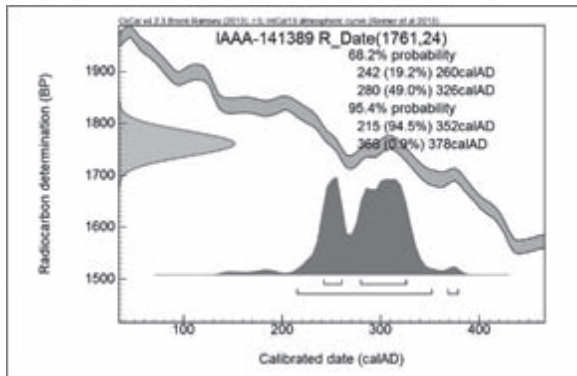
表 2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-141389	$1,510 \pm 20$	82.84 ± 0.24	$1,761 \pm 24$	242calAD - 260calAD (19.2%) 280calAD - 326calAD (49.0%)	215calAD - 352calAD (94.5%) 368calAD - 378calAD (0.9%)

[参考値]

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
- Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム 予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90
- Stuiver, M. and Polach, H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

2. 椋ノ木遺跡第11次発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、木津川上流浄化センター(汚消化タンク)増設工事に先立って京都府流域下水道事務所の依頼を受けて実施したものである。

椋ノ木遺跡は京都府相楽郡精華町に所在する縄文時代から中世までの集落遺跡である。遺跡の大部分は木津川上流浄化センター敷地内に含まれ、これまでに木津川上流浄化センターの諸施設の建設に伴い、10次にわたる発掘調査を実施している(付表1)。今回の調査は第11次調査となる。

これまでの調査で、縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代末から鎌倉時代にかけての各時代の遺構・遺物が見つかっている。特に平安時代末から鎌倉時代については遺構・遺物が豊富で、木津川の舟運に関連する集落と考えられている。また、集落の変遷や地域の土器編年を考える上で重要な資料が数多く得られ、南山城地域を代表する中世前期の集落遺跡のひとつとなっている。

現地調査および整理作業にあたっては、京都府教育委員会、精華町教育委員会ならびに木津川上流浄化センター、地元舟区・里区・西北区の方々をはじめ各関係機関のご指導・ご助言をいただいた。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額京都府流域下水道事務所が負担した。

[調査体制等]

平成25年度現地調査

現地調査責任者 調査課長 水谷壽克

調査担当者 調査課調査第1係長 中川和哉

同調査第3係主任調査員 村田和弘

調査場所 京都府相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木ほか

現地調査期間 平成25年11月6日～平成26年3月4日

調査面積 620㎡

平成26年度整理作業

整理作業責任者 調査課長 石井清司

整理作業担当者 調査課調査第1係長 中川和哉

同調査第1係主任 村田和弘

付表1 調査回数一覧

調査回数	調査期間	調査機関	調査面積	報告書
1	平成7年11月21日～平成8年2月27日	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	1,200㎡	京都府遺跡調査概報第81冊
2	平成8年5月28日～平成9年2月27日		4,700㎡	
3	平成9年5月6日～平成9年11月7日		2,850㎡	京都府遺跡調査概報第85冊
4	平成12年12月18日～平成13年3月5日		1,100㎡	京都府遺跡調査概報第101冊
5	平成13年6月13日～平成14年2月1日		3,400㎡	京都府遺跡調査概報第105冊
6	平成14年6月5日～平成15年2月10日		3,200㎡	京都府遺跡調査概報第110冊
7	平成16年8月18日～平成16年10月1日		300㎡	京都府遺跡調査概報第115冊
8	平成21年11月26日～平成22年3月4日	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	500㎡	京都府遺跡調査報告集第143冊
9	平成22年8月20日～平成23年3月11日		2,500㎡	京都府遺跡調査報告集第151冊
10	平成23年7月25日～平成23年12月16日		1,300㎡	
11	平成25年11月6日～平成26年3月4日		620㎡	本報告

2. これまでの調査と周辺遺跡

1) これまでの調査(第1図)

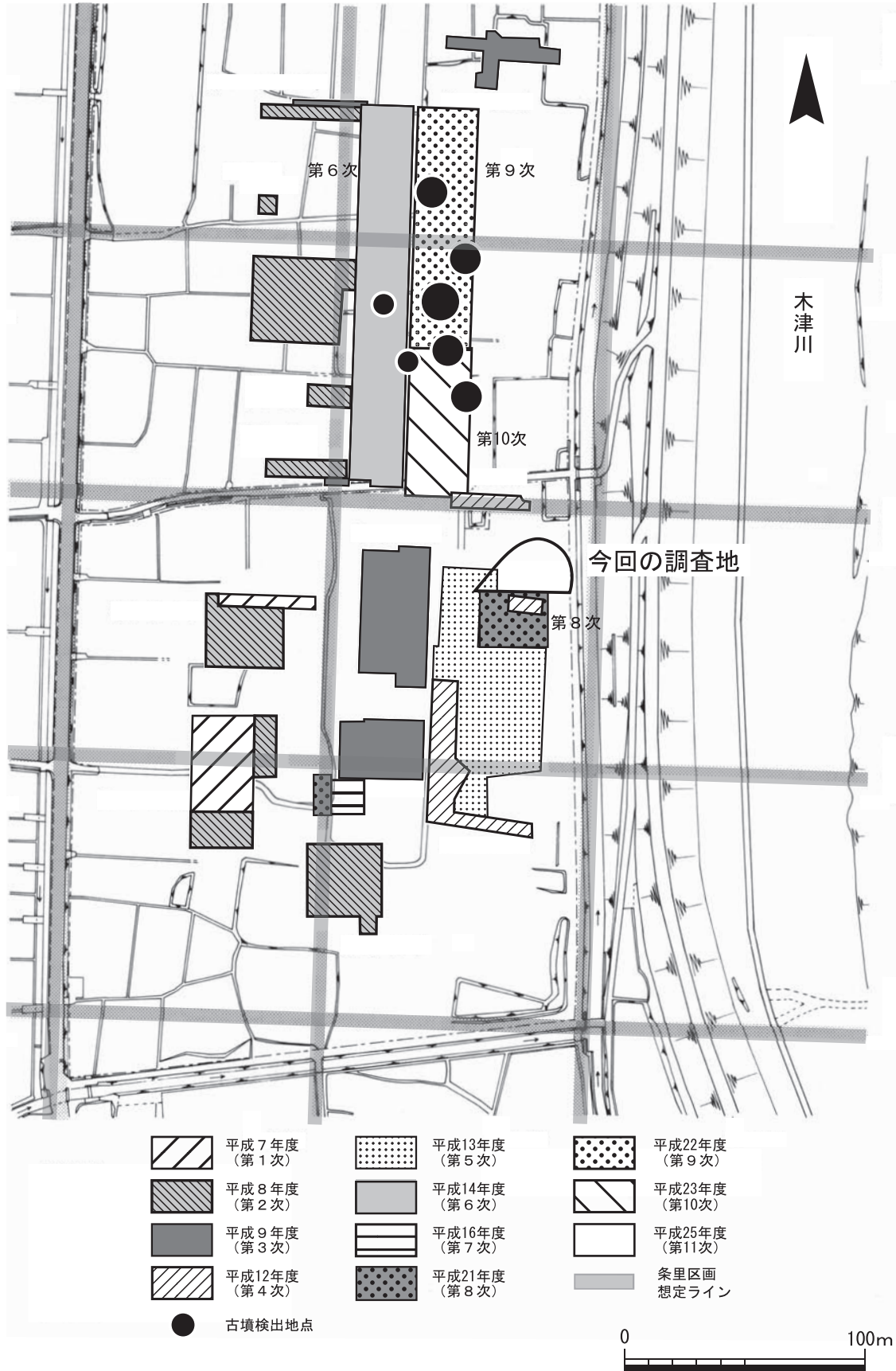
椋ノ木遺跡は三重県を源流とする一級河川である木津川左岸に形成された微高地および後背湿地に立地している。これまでの調査で、縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の大溝、古墳時代前・中期の竪穴建物、古墳時代中期の古墳、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物などのほか、1町(約109m)を基準とした条里制地割に由来する坪境溝や耕作溝などが検出されている。

椋ノ木遺跡で出土した最も古い遺物は縄文時代中期末の北白川C式土器で、そのほかに沈線文系の後期の土器片、晩期の滋賀里Ⅲa式土器、船橋式土器、長原式土器などが出土している。また、第5次調査では翡翠製の玉珠が1点出土している。縄文時代の明確な遺構は第9次調査で検出された晩期の土坑で、土器棺墓が含まれることから一帯は墓域として利用されていたと考えられる。

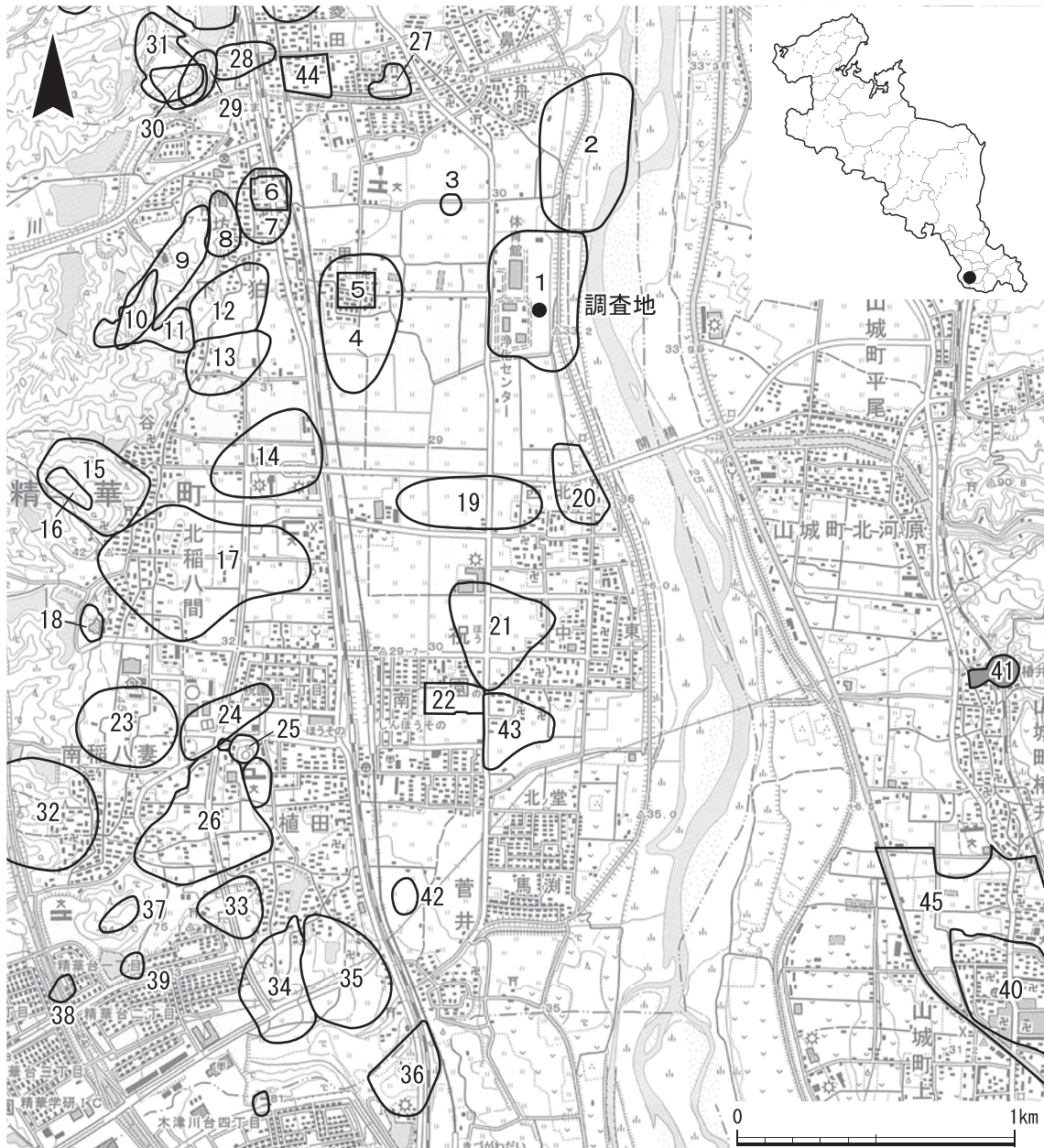
弥生時代については、第6次調査で東西方向の溝S D1001(前期・後期)・1002(中期・後期)が検出されており、第9次調査では溝S D1001の延長部と考えられる後期の溝S D265が検出されている。これらは椋ノ木遺跡が立地する微高地の北端を横切ることから、集落の北を限る溝と推定されている。

古墳時代については、前期から中期前葉にかけての竪穴建物が第4・5・9次調査において検出されている。この時期の遺構は、遺跡内でも木津川よりに偏在している。また、第6・9次調査では、遺跡の北東部において中期末の古墳がまとまって検出されたことから新たな古墳群の存在が明らかになり、椋ノ木古墳群と命名された。これらの古墳は、墳丘および埋葬施設は後世の削平により残存していなかったが、周溝から須恵器(T K208～47併行期)とともに円筒埴輪片も出土している。

飛鳥時代・奈良時代については、木津川市所在の高麗寺廃寺を指標とする高麗寺系の軒丸瓦や奈良時代の鬼瓦片、布目瓦片など遺物は出土するものの遺構は確認されていない。古墳の周溝がわずかしかなかったのに対し、平安時代の建物の柱穴が30cm以上残っていることから、洪



第1図 調査区配置図



- | | | | |
|------------|------------|------------|--------------|
| 1. 棕ノ木遺跡 | 13. 片山遺跡 | 25. 祝園遺跡 | 36. 土師七ツ塚古墳群 |
| 2. 百久保地先遺跡 | 14. 柿添遺跡 | 26. 森垣外遺跡 | 37. 蔭山古墳群 |
| 3. 石ヶ町遺跡 | 15. 城山遺跡 | 27. 春日神社遺跡 | 38. 堂所遺跡 |
| 4. 里遺跡 | 16. 城山古墳群 | 28. 西ノ口遺跡 | 39. 水落遺跡 |
| 5. 里廃寺 | 17. 北稻遺跡 | 29. 薬師寺跡 | 40. 狛城跡 |
| 6. 下狛城館跡 | 18. 国名平古墳群 | 30. 平谷古墳群 | (大里環濠集落) |
| 7. 拝殿遺跡 | 19. 西垣内遺跡 | 31. 薬師山遺跡 | 41. 椿井大塚山古墳 |
| 8. 鞍岡山遺跡 | 20. 祝園神社遺跡 | 32. 政ヶ谷城跡 | 42. 寺東遺跡 |
| 9. 鞍岡神社遺跡 | 21. 中垣内遺跡 | (南稻八妻城跡) | 43. 古屋敷遺跡 |
| 10. 鞍岡山古墳群 | 22. 城ノ内遺跡 | 33. 稻植神社遺跡 | 44. 前川原遺跡 |
| 11. 大福寺遺跡 | 23. 南稻遺跡 | 34. 畑ノ前遺跡 | 45. 上狛北遺跡 |
| 12. 下馬遺跡 | 24. 北尻遺跡 | 35. 畑ノ前東遺跡 | |

第2図 調査地及び周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 田辺・奈良)

水等で削平されたと推定されている。

平安時代から中世にかけては、掘立柱建物、土坑墓、耕作溝、坪境溝など多くの遺構が発掘調査を実施した地区全体に広がっている。

第6・9次調査では平安時代中期の大型の庇付建物が検出されている。第8次調査では鍛冶炉と思われる焼土坑が検出されており、鉄滓やフイゴ羽口が出土している。耕作溝や坪境溝は、現在残っている地割に沿った方向で検出されている。

室町時代以降になると椋ノ木遺跡では顕著な遺構・遺物がないことから、集落は移動し、耕作地に変わったものと考えられる。

2) 周辺の遺跡(第2図)

縄文時代 この時期の遺跡は少なく、大福寺遺跡(11)・畑ノ前遺跡(34)で石匙が出土している。

弥生時代 前期の土器は椋ノ木遺跡の北側に所在する百久保地先遺跡(2)でも出土しており、木津川に近接した場所に弥生時代前期の集落が存在していた可能性が指摘できる。中期の遺跡には竪穴建物などが検出された畑ノ前遺跡や大福寺遺跡、祝園遺跡(25)、森垣外遺跡(26)があり、これらの遺跡は丘陵上、丘陵裾部、河川隣接地に立地している。

古墳時代 前期から中期前葉にかけての竪穴建物が確認されているのは椋ノ木遺跡のみで、柿添遺跡(14)で遺物が出土しているが、そのほかの集落遺跡の様相は不明である。精華町内における古墳時代中期末から後期の集落としては、大壁住居、方形区画などが検出され、陶質土器や韓式系土器が出土していることから在地首長の居住地と考えられている森垣外遺跡がある。

前期から中期前葉の古墳には鞍岡山古墳群(10)、平谷古墳群(30)、北尻遺跡(24)などがある。木津川を挟んで対岸には、三角縁神獸鏡が多量に出土した古墳時代前期の前方後円墳として知られる椿井大塚山古墳が存在する。後期の古墳には西側の丘陵上に立地する平谷古墳群、鞍岡山古墳群、畑ノ前古墳群、畑ノ前東古墳群、城山古墳群(16)などがある。

飛鳥時代 椋ノ木遺跡の西約400mに高麗寺系の軒丸瓦や平城宮式・恭仁宮式の瓦が出土している里廃寺(5)があり、南西約2.5kmに稲峰間氏の館跡と想定されている畑ノ前遺跡がある。また、木津川左岸にある丘陵裾部から椋ノ木遺跡までの平野部では、奈良時代の古山陰道(山陽併用道)が想定されており、丘陵裾部に存在する遺跡群は当時の幹線道路沿いに位置していたと考えられる。

平安時代～室町時代 椋ノ木遺跡の西約1kmに平安時代後期の瓦が出土した下狛城館跡(6)や下馬遺跡(12)がある。下馬遺跡では平安時代の掘立柱建物や柵・井戸などの遺構が確認されたほか、室町時代の瓦や香炉など寺院に関連する遺物が出土している。下馬遺跡の南東に所在する片山遺跡(13)では平安時代中・後期の掘立柱建物や溝・土坑などが確認されている。

また、椋ノ木遺跡から約500m南には祝園神社がある。祝園神社は『新抄格勅符抄』に記載されている大同元(806)年の記録によると平安時代初期から存在していたようである。歴史地理学では祝園神社の端を通して京都・大阪方面から奈良へといたる平安時代以降の道路が復元されている。

近世 祝園地区と木津川の対岸にある木津川市平尾を結ぶ「開の渡し」や棕ノ木遺跡の北側にある舟地区とその対岸の木津川市綺田を結ぶ「藪の渡し」があり、郡山街道と奈良街道を結んでいた。棕ノ木遺跡はこれら2つの渡しの中間に位置している。また、木津川上流浄化センター敷地の中央を東西に通る道は、遺跡の西側にある里地区の集落の中軸から東西方向に延びており、木津川の河川敷に至る『浜道』として利用されてきた。

3. 調査の方法

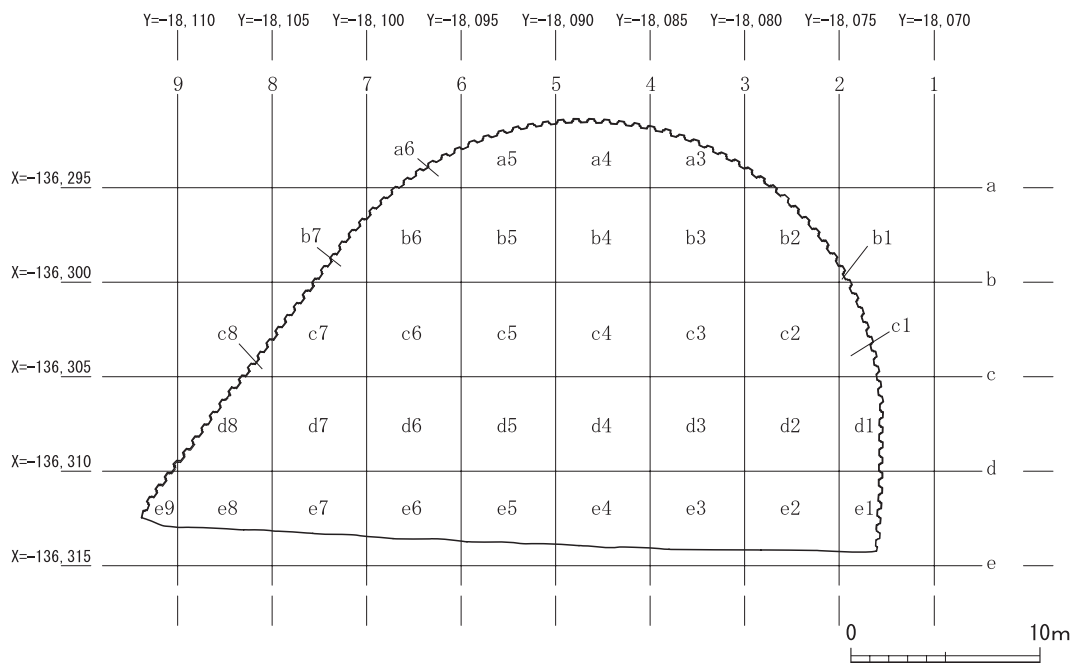
1) 調査の方法

今回の調査地は、第5次調査8トレンチの東、第8次調査Aトレンチの北に接して設定した。事前に打たれた鋼板矢板に囲まれた範囲で調査を実施することとなったため半円形のトレンチとなっている。

現地調査は、遺構面直上まで慎重に重機で掘削を行い、その後は人力による包含層の除去、遺構精査、遺構掘削を実施した。検出した遺構・出土遺物については平面・断面図、出土状況図を作成し、記録写真を撮影した。遺構掘削後、空中写真・図化用写真撮影を実施した。また、平成26年1月19日に現地説明会を実施し、77名の参加を得た。

調査にあたっては、調査地全域を対象として国土座標(世界測地系)に基づいた地区割りを設定した(第3図)。地区割りは、5m四方のグリッドを小区画とし、区画の基準線はそれぞれ国土座標系と一致させ、東西方向は東から1～9とし、南北方向は北からa～eまでとした。地区名は5mグリッドの南東隅の交差点の名称で表すものとし、「c4地区」などと表記する。

検出した遺構の表記については、原則として遺構面ごとに通し番号をつけ、第1面では001～



第3図 地区割り図

200番台、第2面では300番台、第3面では400番台の番号を付けた。建物や柵を構成する遺構については、別途、遺構番号を付けた。遺構の性格を示す略号は、SB：掘立柱建物、SA：柵、SD：溝、SK：土坑、SP：柱穴・ピット、SX：不明遺構・その他である。なお、SPは建物を構成するものや柱痕跡が残るものについては柱穴とし、確認できないものについてはピットとする。

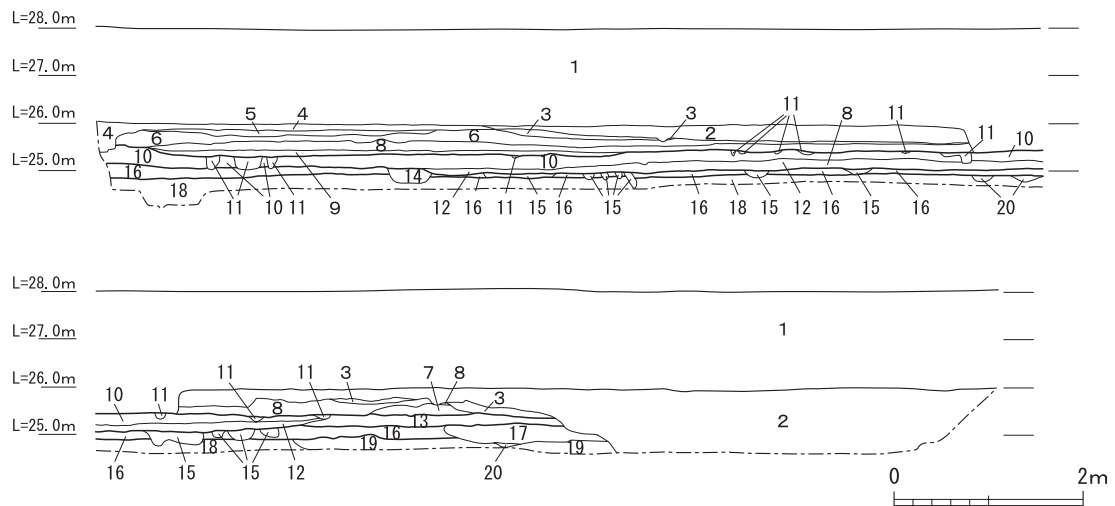
2) 出土遺物の整理作業ならびに報告書作成作業について

平成26年度は、平成25年度調査で出土した遺物の整理作業ならびに報告書作成作業を実施した。整理作業では、遺物の洗浄・接合・注記を順次実施した。なお、洗浄作業の一部は平成25年度にも実施した。注記作業終了後、報告に必要な遺物の選別を行い、これらについては実測・拓本を行った。実測した遺物のうち、復元可能な遺物については石膏を用いて復元を実施した。また、復元できた遺物や小片でも重要な遺物については、遺物写真の撮影を行い図版に掲載した。

4. 土層と検出遺構

1) 層序(第4図)

調査地周辺の現地表面の標高は約28mである。調査区の南壁での土層堆積状況は次のとおりである。第1・2層は汚消化タンク建設に伴う現代の盛土である。第3・5・6層は、これまでの調査成果から木津川上流浄化センター建設前の耕作土と思われる。その下層には0.1~0.2mの粘



- | | |
|------------------------------|----------------------------------|
| 1. 現代盛土 | 11. 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土<遺構埋土> |
| 2. 現代盛土 | 12. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土 |
| 3. 灰褐色 (10YR5/2) 粘質土 | 13. 灰色 (10Y5/1) 粘質土 |
| 4. 鋼板矢板埋め土 | 14. オリーブ灰色 (5GY6/1) 粘土<ブロック状> |
| 5. 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土 | 15. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土<遺構埋土> |
| 6. オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘質土<粗砂混じり> | 16. にぶい黄橙色 (10YR7/2) 粘土 |
| 7. 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土<粘性が強い> | 17. オリーブ黄色 (5Y6/4) 粘質土 |
| 8. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土 | 18. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘土 |
| 9. にぶい赤褐色 (5YR5/3) 粘質土 | 19. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粘土 |
| 10. にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘質土 | 20. 褐色 (10YR4/4) 粘質土<粘性が強い・遺構埋土> |

第4図 南壁土層断面図

土質層(第7～9層)が堆積する。

第10層および第13層の上面で平安時代後半から鎌倉時代の遺構(埋土第11層)を検出した。その下層には粘質土層(第12・13層)が堆積している。第16層の上面で古墳時代と思われる遺構(埋土第14・15層)を検出した。また、第18層および第19層の上面で、縄文時代晩期の遺構(埋土第20層)を検出した。

なお、調査区の東部で、さらに古い時期の遺構面の有無を確認するため標高約24.5mまで掘削作業を行ったが、遺構面は存在せず、無遺物層のにぶい黄色粘土(第18層)が続くことを確認した。

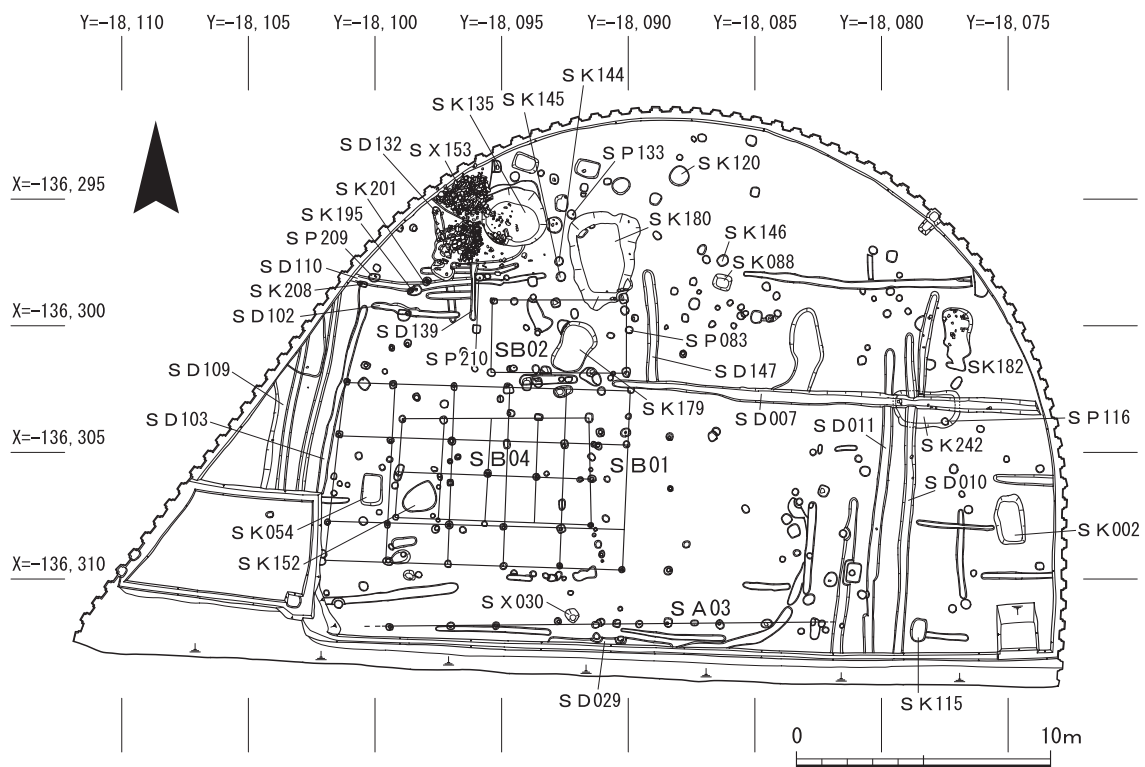
2) 検出遺構

今回の調査地は第5次調査地の北東部、第8次調査の北部に接しており、これまでの調査成果と同様、平安時代後半から鎌倉時代、古墳時代、縄文時代の3時期の遺構面を確認した。

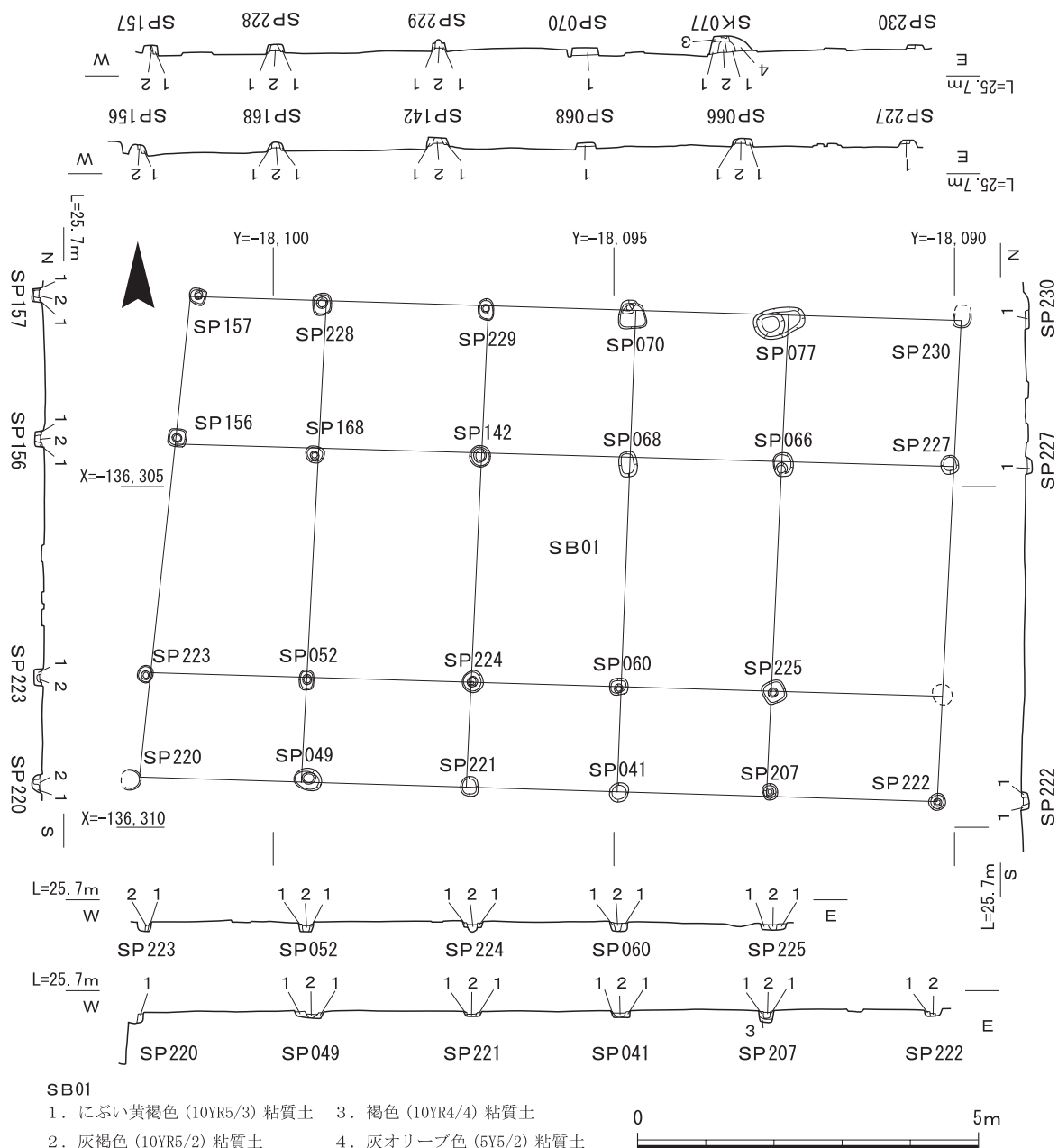
① 第1面(第5図)

標高約25.3m、にぶい黄橙色粘質土および灰色粘質土の上面で、平安時代後半から鎌倉時代の掘立柱建物3棟や柵1条、磔敷き1基、多数の溝やピット、土坑などを検出した。

掘立柱建物SB01(第6図) 南北3間(最大約7.2m)、東西5間(最大約11.8m)の東西方向の大型建物である。建物の主軸は北に対して3°東に振る。梁行の柱間は、北から2.2m・3.4m・1.6mで、中央が広い。桁行の柱間は1.8～2.5mを測り、等間隔ではない。柱穴の掘形は直径約0.3mの円形ないし一辺約0.25mの隅丸方形で、深さは0.1m前後と浅く、残存状態は良くなかった。柱痕跡は直径約0.18mであった。柱穴から瓦器の細片などが出土したが詳細な時期については不明



第5図 第1面遺構配置図

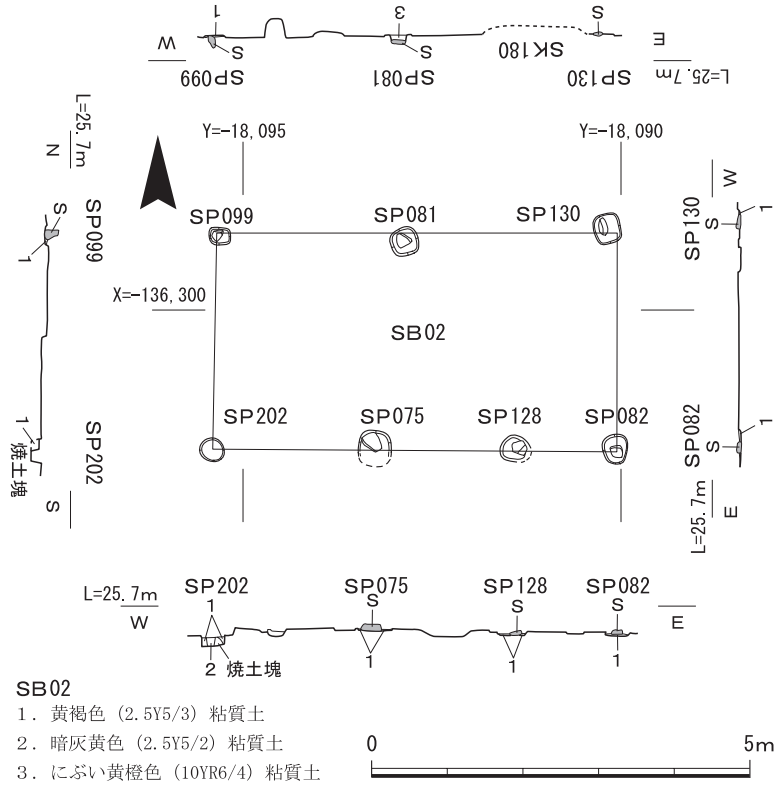


第6図 掘立柱建物S B01平面・断面図

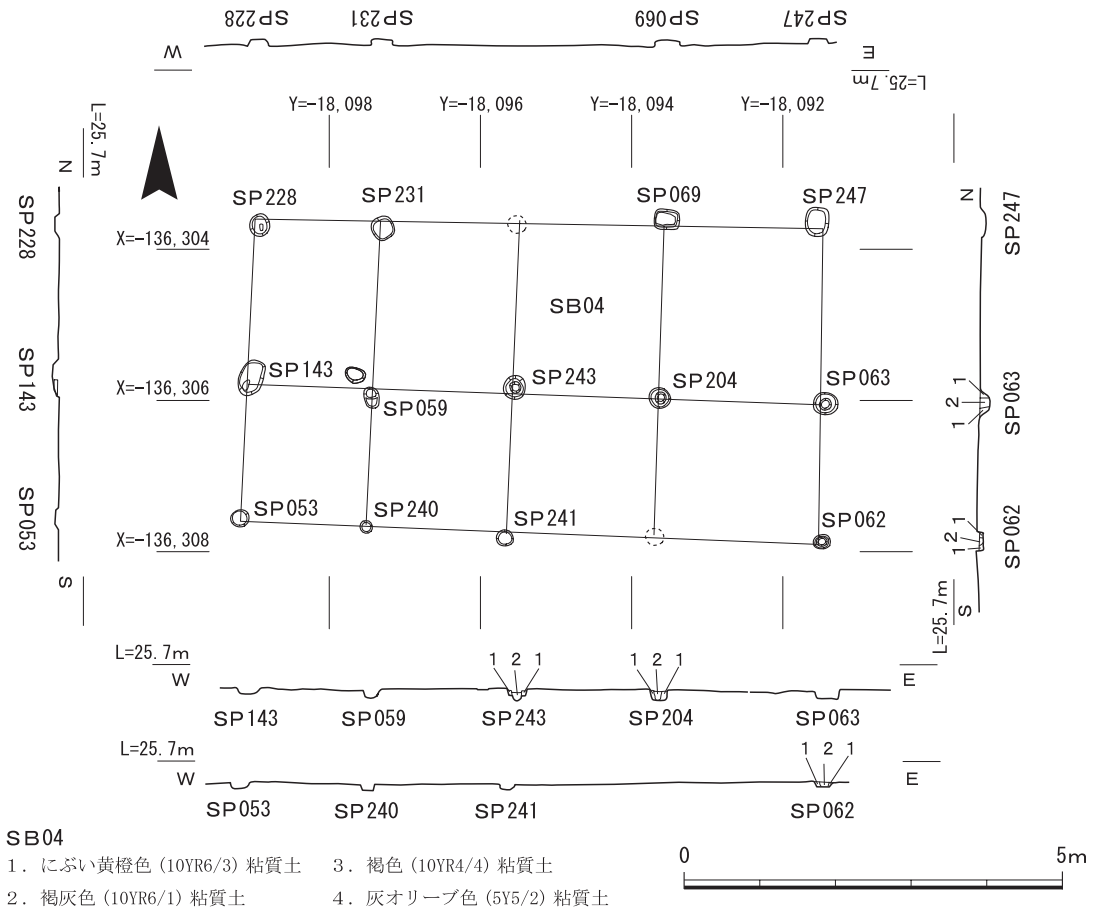
である。

掘立柱建物S B02(第7図) 南北1間(約2.9m)、北側の柱筋は東西2間、南側の柱筋は3間(約5.3m)の東西方向の建物である。建物の主軸は北に対して2°東に振る。梁行の柱間は2.8mと2.9m、桁行の柱間は1.5~2.7mを測る。柱穴S P202の掘形は直径約0.3mの円形で、深さ0.1mを測る。埋土には焼土塊が含まれる。その他の柱穴の掘形は一辺0.3~0.5mの隅丸方形で、深さ0.05mを測る。検出した7基の柱穴の内、6基の柱穴には自然石を利用した根石が据えられていた。各柱穴からの出土遺物はなく、建物の詳細な時期は不明であるが、S B01と近接していることや柱筋が揃っていないことから、S B01とは時期が異なると考えられる。

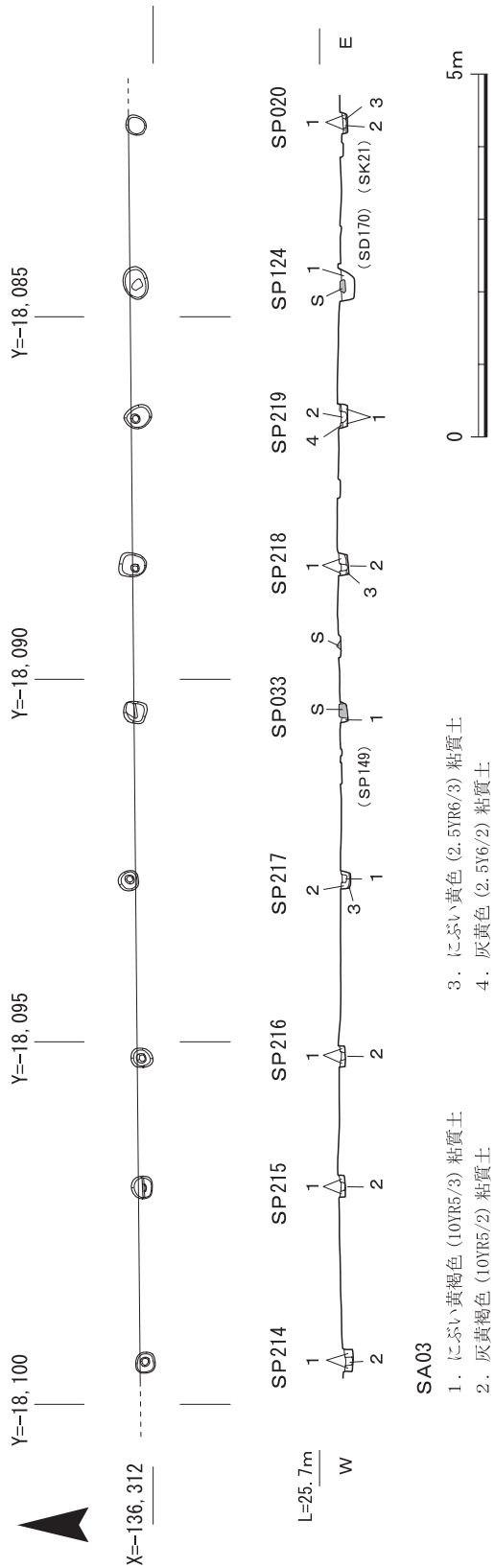
掘立柱建物S B04(第8図) 掘立柱建物S B01と重複して検出した、南北2間(約3.1m)、東



第7図 掘立柱建物S B02平面・断面図



第8図 掘立柱建物S B04平面・断面図



第9図 柵SA03平面・断面図

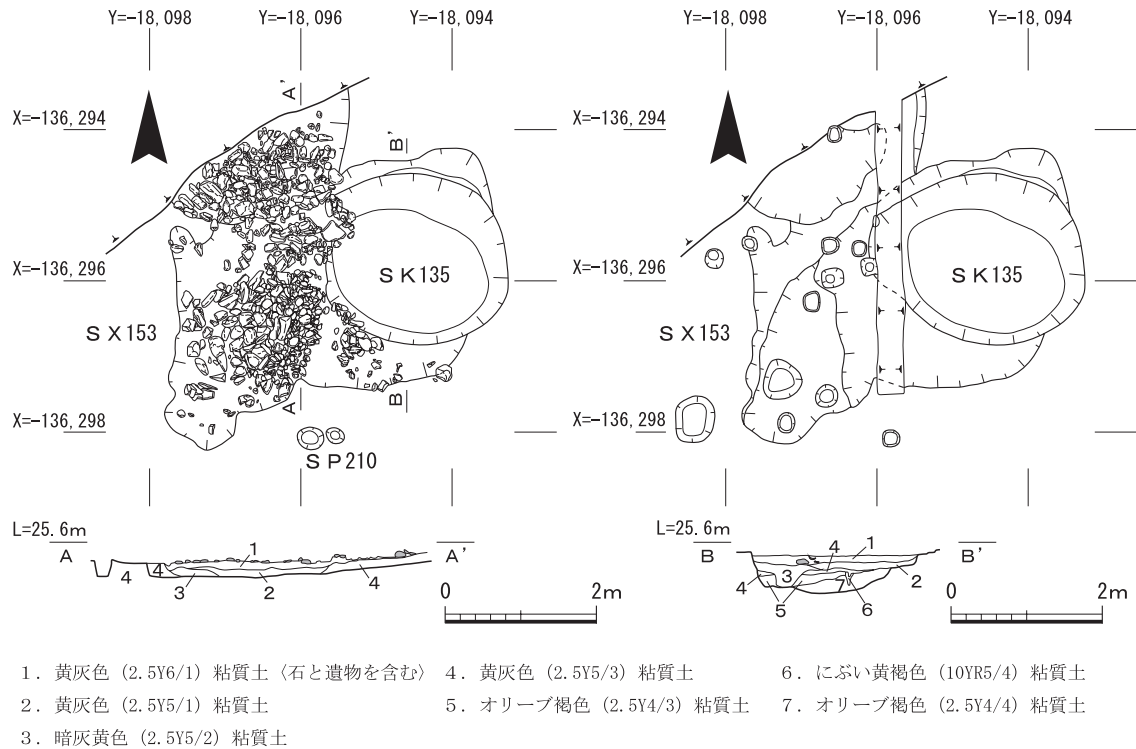
西4間(約7.5m)の東西方向の総柱建物である。建物の主軸は北に対して2°東に振る。梁行の柱間は1.8~2.3m、桁行の柱間は1.8~2.1mを測る。柱穴の掘形は、直径約0.25mの円形ないし一辺約0.3mの隅丸方形で、深さは0.05~0.1mを測る。柱痕跡は直径約0.1mを測る。各柱穴からの出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

柵SA03(第9図) 掘立柱建物SB01の南側で掘立柱建物SB04の北側柱筋に並行して検出した。柱間は8間以上で、等間隔ではない。検出した長さは柱穴SP214と柱穴SP020間で17mを測る。柱穴の掘形は直径0.25~0.4mで、深さ0.05~0.2mを測る。柱穴SP033と柱穴SP124には根石が据えられていた。掘立柱建物SB04と主軸がほぼ同じであることから同時期の遺構である可能性が高い。遺物は出土しなかった。

土坑SK135(第10図) 調査地の北西部で検出した円形を呈する土坑である。直径2.3m、深さ0.5mを測る。井戸の可能性が考えられたが、井戸枠等の痕跡は確認できなかった。13世紀中頃と考えられる土師器皿や瓦器椀、鉄滓などが出土した(第19図1~19)。

礫敷きSX153(第10図) 土坑SK135と重複して検出した。礫敷きの範囲は東西約2m、南北約3.4mを測り、5~15cm程の大きさの円礫が敷き詰められていた。礫の上面で13世紀末から14世紀初めの土師器皿や瓦器椀、白磁椀、青磁椀、灰釉陶器や温石と考えられる有孔滑石製品などが出土した(第19図27~第20図38)。

土坑SK002(第11図) d1~d2地区で検出した長方形を呈する土坑である。東西1.2



第10図 土坑 S K 135・礫敷き S X 153平面・断面図

m、南北1.9m、深さ0.15mを測る。13世紀代の土師器皿が出土した(第20図40)。

土坑 S K 054 (第11図) d6~d7地区で検出した長方形の土坑である。東西0.8m、南北1.22m、深さ0.2mを測る。土師器皿が出土した(第20図41)。

土坑 S K 088 (第11図) b4地区で検出した隅丸方形の土坑である。東西0.7m、南北0.6m、深さ0.24mを測る。遺物は出土しなかった。

土坑 S K 115 (第11図) e2地区で検出した隅丸方形の土坑である。東西0.62m、南北0.92m、深さ0.1mを測る。土師器の細片が出土したが、図示できなかった。

土坑 S K 120 (第11図) a4地区で検出した円形の土坑である。直径0.79m、深さ0.49mを測る。遺物は出土しなかった。

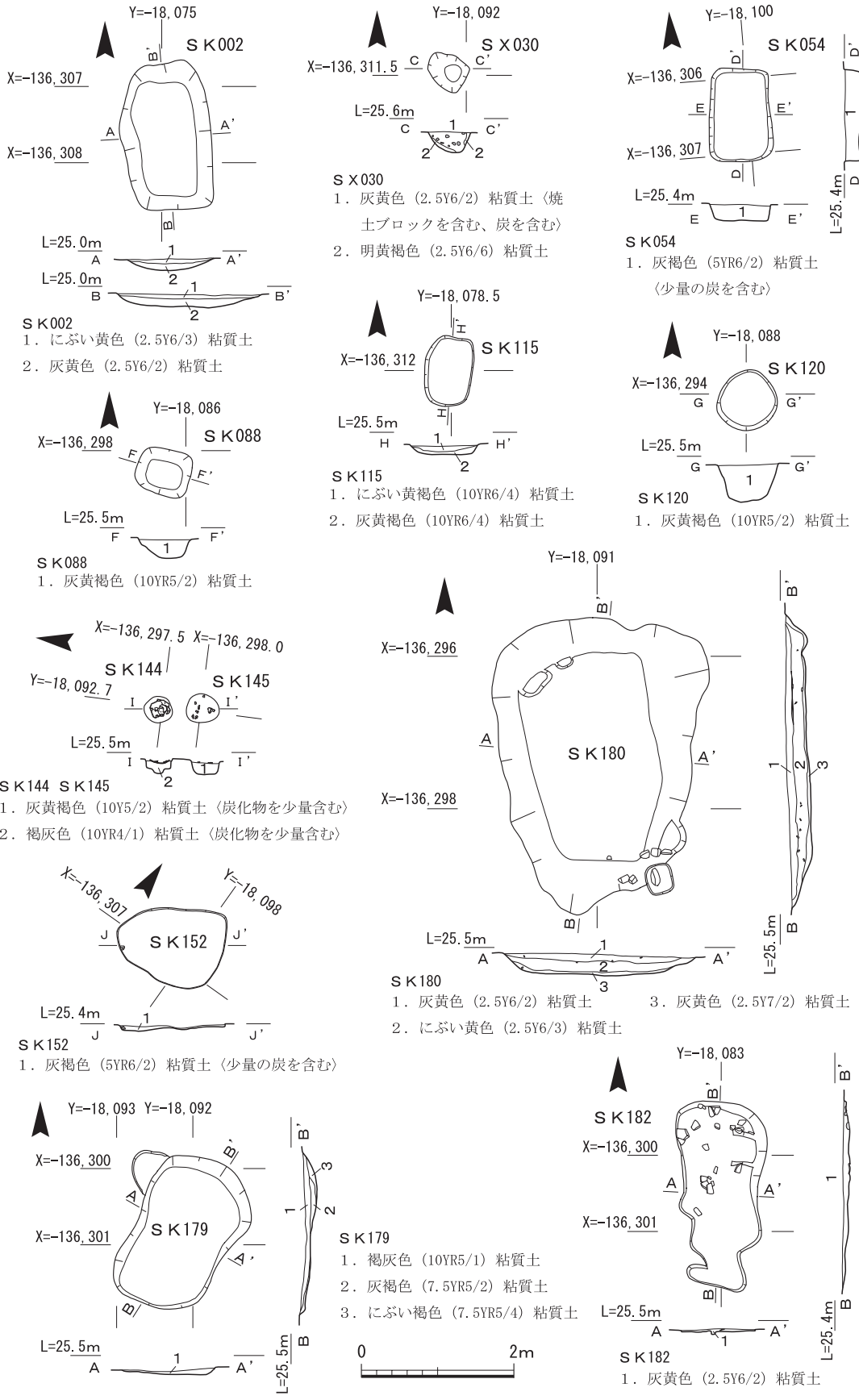
土坑 S K 144 (第11図) b5地区で検出した円形の土坑である。東西0.36m、南北0.38m、深さ0.2mを測る。13世紀中頃の土師器羽釜や瓦器椀が出土した(第20図39)。

土坑 S K 145 (第11図) b5地区、土坑 S K 144の南側で検出した楕円形の土坑である。東西0.43m、南北0.38m、深さ0.18mを測る。土師質の土器片が出土したが、器種・時期については不明である。

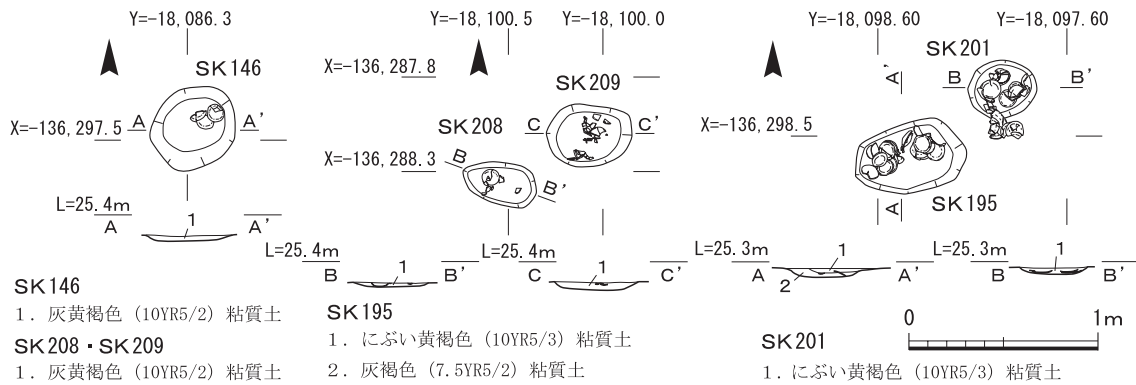
土坑 S K 146 (第12図) b4地区、土坑 S K 088の北側で検出した円形の土坑である。直径0.42m、深さ0.2mを測る。13世紀前半の土師器皿が出土した(第20図42・43)。

土坑 S K 152 (第11図) d6地区で検出した不定形の土坑である。東西1.4m、南北1m、深さ0.06mを測る。遺物は出土しなかった。

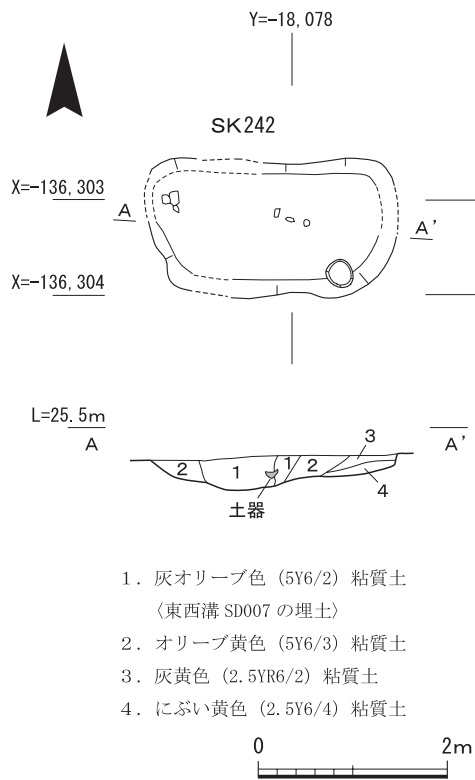
土坑 S K 179 (第11図) c5地区で検出した不定形の土坑である。東西1.23m、南北2.1m、深さ



第11図 その他の土坑平面・断面図



第12図 土坑SK146・195・201・208・209平面・断面図



第13図 土坑SK242平面・断面図

0.16mを測る。土師器や瓦器の細片が出土したが、図示できる資料はなかった。

土坑SK180(第11図) b4~b5地区、土坑SK179の北側で検出した不定形な土坑である。東西2.52m、南北3.9m、深さ0.27mを測る。12世紀後半から13世紀初頭の瓦器椀・皿、瓦質土器鉢、土師器皿、白磁椀などが出土した(第20図93~100)。

土坑SK182(第11図) b2~c2地区で検出した不定形の土坑である。東西1.2m、南北2.42m、深さ0.08mを測る。14世紀前半の土師器羽釜などが出土した(第21図103・104)。

土坑SK195(第12図) b6地区において検出した楕円形の土坑である。南北0.58m、東西0.36m、深さ0.04mを測る。13世紀前半の土師器皿がまとめて出土した(第20図44~58)。

土坑SK201(第12図) b6地区、土坑SK195の北東側で検出した円形を呈する土坑である。東西

0.36m、南北0.3m、深さ0.03mを測る。12世紀後半の土師器皿が出土した(第20図59~68)。

土坑SK208(第12図) b7地区で検出した楕円形の土坑である。南北0.4m、東西0.22m、深さ0.02mを測る。13世紀前半の土師器皿が出土した(第20図69)。

土坑SK209(第12図) b6~b7地区において土坑SK208の北東側で検出した楕円形の土坑である。南北0.45m、東西0.32m、深さ0.04mを測る。12世紀後半の土師器皿が出土した(第20図70~73)。

土坑SK242(第13図) c2地区で検出した長方形を呈する土坑である。東西2.64m、南北1.4m、深さ0.34mを測る。溝SD007より後に掘削されている。14世紀の土師器羽釜片が出土した(第21

図107・108)。

土坑S X030(第11図) c5地区で検出した不定形の土坑である。東西0.52m、南北0.5m、深さ0.27mを測る。埋土に焼土塊や炭が含まれるが、土坑壁面には焼けた痕跡がなく、性格は不明である。遺物は出土しなかった。

溝S D103 b7～d7地区で検出した南北方向の溝である。幅0.3m、検出長7.6m、深さ0.15mを測る。溝は掘立柱建物S B01の柱穴S P157より後に掘削されている。遺物は出土しなかった。

溝S D007 c1～c5地区で検出した東西方向の溝である。最大幅0.6m、検出長17m、最深0.45mを測る。掘立柱建物S B01の柱穴S P230より後に掘削されており、S B01より後出する。遺物は出土しなかった。

溝S D010 c1～e1地区で検出した南北方向の溝である。幅0.45m、検出長12.5m、最深0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

溝S D011 c2・c3・d2・d3・e3地区、溝S D010の西側で検出した南北方向の溝である。幅0.45m、検出長12m、最深0.06mを測る。遺物は出土しなかった。

溝S D109 b7～d7地区で検出した南北方向の大型溝である。最大幅2.5m、検出長8.4m、最深0.1mを測る。溝の中央に2条の小溝が切り合っている。溝の東肩部を掘立柱建物S B01の柱穴S P157が掘り込んでおり、S B01に先行するものと考えられる。遺物は出土しなかった。この溝は第5次調査で検出された溝S D51・215・222につながる可能性が高い。

溝S D110 b5～b7地区で検出した東西方向の溝である。幅0.35m、検出長7.6m、深さ0.25mを測る。溝S D109より後に掘削されている。12世紀後半から13世紀初頭の土師器皿がまとめて出土した(第20図74～92)。

溝S D139 b6地区で検出した溝で南北方向の溝である。幅0.2m、検出長5.6m、深さ0.05mを測る。溝の北側はS X153の上面で検出した。土師器皿や羽釜が出土した(第20図101・102)。

ピットS P083 c4・c5地区で検出した円形を呈するピットである。直径0.32m、深さ0.1mを測る。銭貨が1点出土した(第21図109)。

ピットS P133 b5地区で検出した円形を呈するピットである。直径0.32m、深さ0.15mを測る。13世紀から14世紀の土師器羽釜が出土した(第21図105)。

ピットS P210 b6地区で検出した円形を呈するピットである。直径0.28m、深さ0.1mを測る。13世紀と考えられる瓦質土器鍋が出土した(第21図106)。

②第2面(第14図)

標高約25.0m、にぶい黄橙色粘土の上面で、遺構の密度は希薄であるが、古墳時代のピット群や土坑を検出した。ピット群の多くは直径0.12m、深さ0.1mほどで、建物としてまとまるものはなかった。古墳時代の遺物は微量であるが、周辺の調査地の古墳時代の遺構面と標高が近いことから、古墳時代の遺構面と判断した。

土坑S K300(第15図) c3・c4・d3・d4・e3・e4地区で検出した不定形の土坑である。最大幅4m、南北の長さ11.7m、深さ0.04mを測る。縄文土器片が出土しているが、下層からの混入と



第14図 第2面遺構配置図

思われる(第21図111・112)。

土坑 S K 310 d1・d2地区、土坑 S K 300の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。東西2m、南北1.6m、深さ0.15mを測る。遺物は出土しなかった。

③第3面(第16図)

標高約24.8m、にぶい黄色粘土の上面で、遺構密度は希薄であるが、縄文時代の土坑やピットなどを検出した。ピット群は直径約0.08~0.12m、深さ約0.1mの円形を呈する。遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。調査地南東隅で縄文時代晩期の土器片がまとまって出土しており、S X 410とした。また、遺構面を覆うオリーブ黄色粘質土(第4図17層)中から石鏃(第21図110)が出土した。

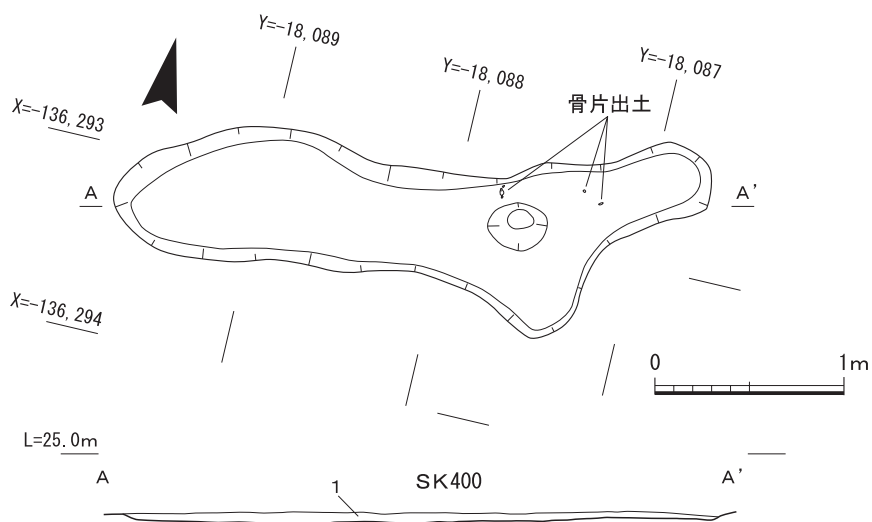
土坑 S K 400(第17図) a4地区で検出した東西に長い土坑である。最大幅0.6m、東西3.4m、深さ0.04mを測る。図示できなかった



第15図 土坑 S K 300平面・断面図



第16図 第3面遺構配置図



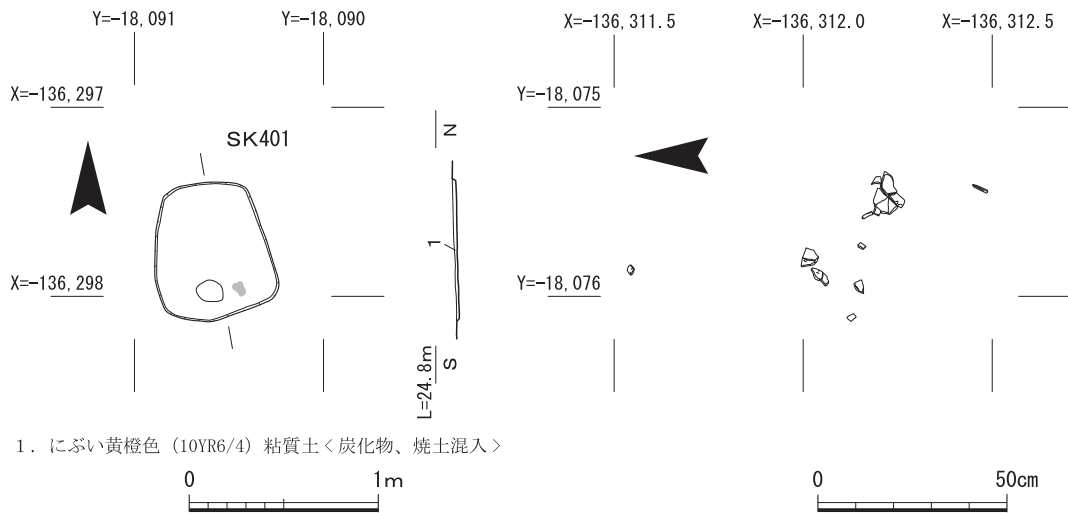
1. にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘質土 (炭化物、焼土が少量混じる。骨片が少量出土)

第17図 土坑SK400平面・断面図

が、縄文土器の細片数点とともに骨片が出土したが、小片のため種別・部位は特定できなかった。

土坑SK401 (第18図左) b5地区で検出した隅丸方形を呈する土坑である。一辺0.5m、深さ0.1mを測る。埋土には炭や5cm程の焼土塊が含まれる。遺物は出土しなかった。

土器集中地点SX410 (第18図右) e2地区の東端で、遺構の輪郭は確認できなかったが、縄文土器が集中して出土した。第2面の土坑SK300の床面で出土した縄文土器 (第21図111・112) は、本来第3面に伴うものが混入した可能性が高い。



第18図 土坑SK401平面・断面図、土器集中地点SX410縄文土器出土状況図

5. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺物整理箱18箱で、本報告に実測図を掲載した遺物は113点である。

各遺構面の遺構などから出土した遺物の中から、主に復元および図示が可能であったものについて報告する(第19～21図、付表2)。遺物は縄文土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器などの土器類のほか、平瓦や温石、石鏃、銭貨などが出土している。

土坑SK135出土遺物(第19図1～19) 1～11は12世紀後半の土師器皿である。12は須恵器杯蓋である。古墳時代の遺物が混入したと思われる。13は大和型瓦器椀である。13世紀のものである。14～16は土師器羽釜である。15・16は大和型である。17は龍泉窯青磁椀の口縁部である。18は白磁椀の口縁部である。19は鉄滓である。縦4.65cm、横4.6cm、重さは51.9gである。

礫敷きSX153出土遺物(第19図20～第20図38) 20～22は13世紀中頃から14世紀初めの土師器皿である。23は須恵器杯身である。古墳時代の遺物が混入したと思われる。24は大和型の土師器羽釜である。25は灰釉陶器壺の底部である。26・27は瓦質土器のミニチュアの羽釜で、三足が付く形態のものと思われる。28・29は東播系須恵器鉢である。30・31は白磁椀である。31の見込みには陰刻文が施されている。32は龍泉窯青磁椀の高台である。33～35は大和型瓦器椀である。36・37は平瓦片である。凸面に縄目が残る。38は滑石製温石の破片である。厚さ1.75cmを測る。中央には約6mmの穴が開いており、吊り下げて使用されたと思われる。

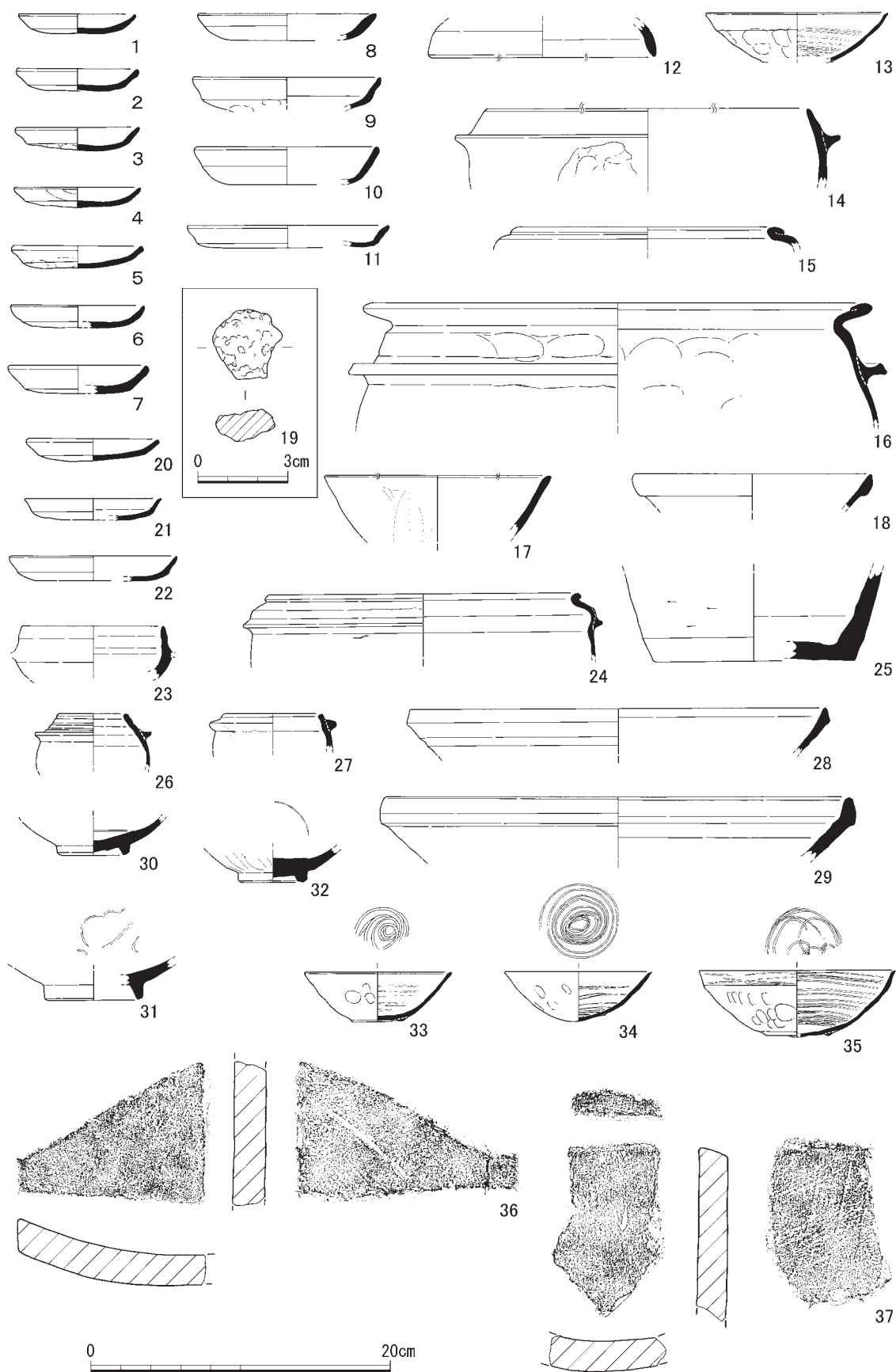
土坑SK002出土遺物(第20図40) 40は13世紀代の土師器皿である。

土坑SK054出土遺物(第20図41) 41は土師器皿である。詳細な時期は不明である。

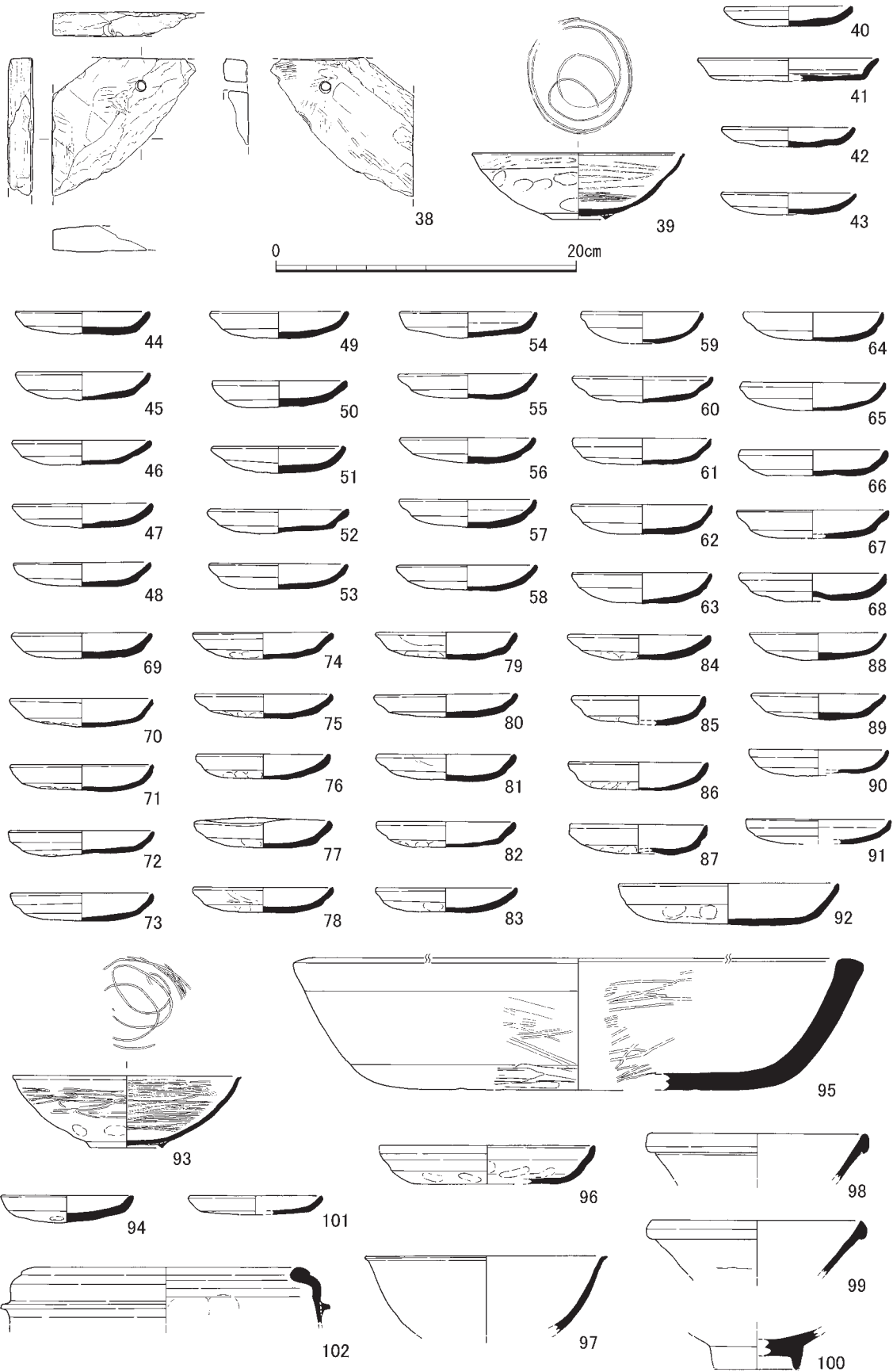
土坑SK144出土遺物(第20図39) 39は大和型瓦器椀である。13世紀中頃のものであろう。

土坑SK146出土遺物(第20図42・43) 42・43は13世紀前半の土師器皿である。

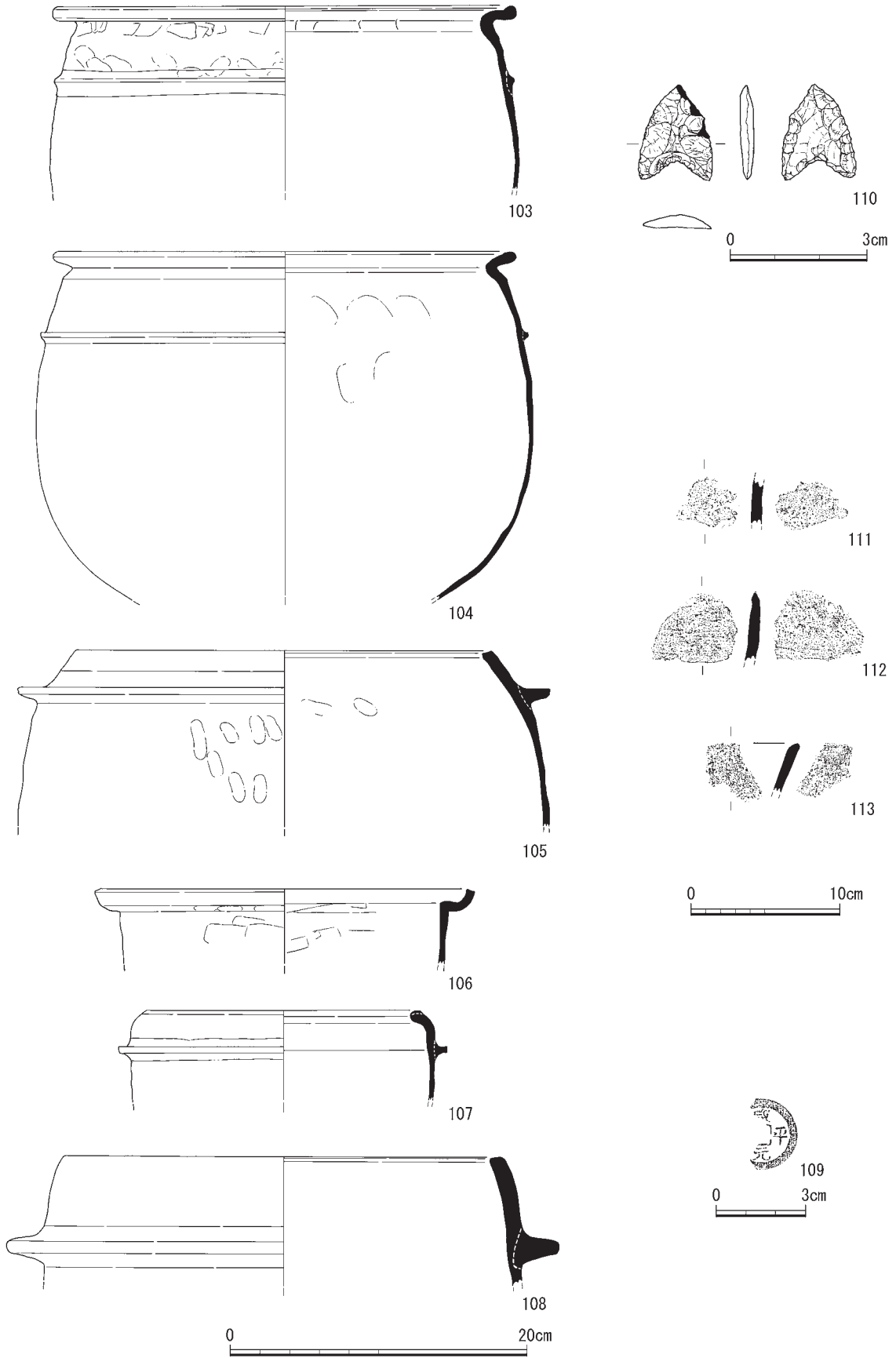
土坑SK180出土遺物(第20図93～100) 93は大和型瓦器椀、94は瓦器皿、95は瓦質土器浅鉢



第19図 出土遺物実測図 1



第20図 出土遺物実測図2



第21図 出土遺物実測図 3

である。96は土師器皿、97～100は白磁椀である。これらの時期は12世紀後半から13世紀初頭である。

土坑S K 182出土遺物(第21図103・104) 103・104は大和型の土師器羽釜である。14世紀前半のものである。

土坑S K 195出土遺物(第20図44～58) 44～58は13世紀前半の土師器皿である。

土坑S K 201出土遺物(第20図59～68) 59～68は12世紀後半の土師器皿である。61・62・65～68は口縁部に2段ナデを施す。

土坑S K 208出土遺物(第20図69) 69は13世紀前半の土師器皿である。

土坑S K 209出土遺物(第20図70～73) 70～73は12世紀後半の土師器皿である。72・73は口縁部に2段ナデを施す。

土坑S K 242出土遺物(第21図107・108) 107・108は土師器羽釜である。107は大和型で、108は大阪方面のものと考えられる。いずれも14世紀代のものである。

溝S D 110出土遺物(第20図74～92) 74～92は12世紀後半から13世紀初頭の土師器皿である。90・91は口縁部に2段ナデを施す。

溝S D 139出土遺物(第20図101・102) 101は土師器皿である。102は大和型の土師器羽釜で、14世紀代のものである。

ピットS P 083出土遺物(第21図109) 109は中国・北宋代に鑄造された咸平元寶である。初鑄は998年である。

ピットS P 133出土遺物(第21図105) 105は土師器羽釜である。13世紀もしくは14世紀代のものである。

ピットS P 210出土遺物(第21図106) 106は瓦質土器鍋である。13世紀代のものであろう。

土器集中地点S X 410(第21図113) 113は縄文土器片である。小片で摩滅が著しいが口縁端部が残存しており、晩期の深鉢と思われる。

包含層出土遺物(第21図110～112) 110は第3面の精査時に出土した基部に抉りをもつ凹基式石鏃である。石材はサヌカイトで、一部欠損しているが全長は2.2cm、最大幅は1.65cmを測る。

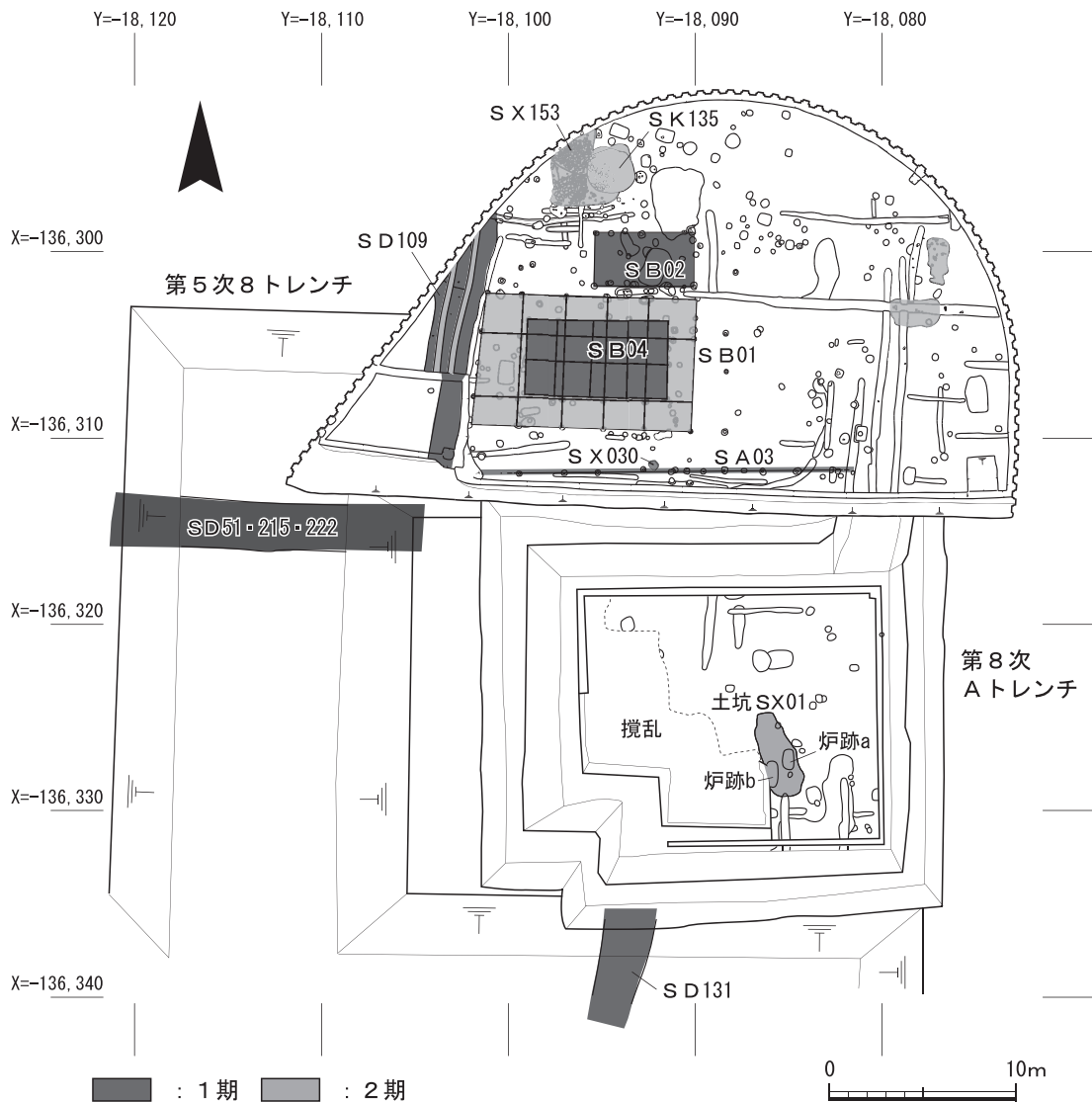
111・112は縄文土器の深鉢片と思われる。土坑S K 300から出土したが、第3面からの混入遺物と思われる。ともに小片で摩滅が著しいが、112は口縁端部が残存する。(村田和弘)

6. まとめ

今回の調査では、周辺の調査と同じように縄文時代・古墳時代・平安時代末から鎌倉時代の3枚の遺構検出面から遺構・遺物を検出することができた。

縄文時代・古墳時代については、性格不明の遺構と若干の遺物が出土しただけで、遺物量と遺構の密度から生活域から離れていたと考えられる。

平安時代末から鎌倉時代の遺構については、出土遺物から12世紀後半から13世紀初め、13世紀中ごろから14世紀初めの2群に分かれる。柱穴内からの遺物がなく時期の決定が困難であるが、



第22図 第5・8・11次調査平安時代末～鎌倉時代遺構平面図

S B01とS B02・S B04は想定される建物の軒が近接したり、重複することから時期の異なる建物と考えられる。建物軸から検討を加えると、S B02とS B04は東西方向の柱列が並行しており同時期とみなされる。また、S A03も同じくほぼ両建物の東西柱列と並行することから同じ時期と考えられる。以上からS B01とS B02・04、S A03の2群の構造物に分けられ、遺物の出土した2群の遺構の時期に対応すると想定できる。時期の確定であるが、遺構の残りが全体的に悪いことから、大きく当時の地表面が削られていることがわかる。こうした地形の改変を考慮するとS B01の西側に近接したS D109は、S B01とは時期が異なると考えられる。こうした当時の区画溝と考えられる大型の溝は、上記した2時期の遺構で考えるとS B02・04に伴う溝と考えられる。S D109の上面には規模の小さな溝が重複しており、これらはS B01に伴う雨落ち溝なども考えることができる。こうした傍証からS B01に対してS B02・04、S A03が先行する時期の遺構であると想定できる。

近接する第8次調査では13世紀中ごろの鍛冶関連遺構が検出されているが、今回の調査でも焼土などが詰まったS X030が遺構の性格が異なる構造物であるS A03に近接していることから鍛冶関連遺構と時期差がある可能性が指摘できる。また、自然石の根石を持つピットは第8次調査では12世紀後半の遺物を伴っており、同じく根石を持つS B02、S A03の想定できる年代観と齟齬しない。

今回の調査地点は、1坪の中では北辺の中央部にあたり、北辺には近世には存在していた木津川の船着場と集落を結ぶ浜道が存在している(第1図)。この東西道路(浜道)が中世から位置を変えていないとすれば、今回の敷地は主要道路に面していたと位置づけられる。この敷地は12世紀後半から13世紀はじめまで南を柵で区画された小規模な建物が2棟並列しており、13世紀中ごろに区画する柵がなくなり、大型建物S B01を中心に鍛冶関連の遺構が点在する工房域として利用されている。また、S B01は東西に庇を持ち、母屋の梁間が3.4mと空間の広い土間があり、工房に適した構造であると考えられる。鍛冶関連遺構はその南側の広場において確認できる。

今回の調査では周辺条里地割に見られる1坪の北辺1遇ではあるが、中世の土地利用変遷を想定することができる貴重な調査例となった。(村田和弘・中川和哉)

<参考文献>

- 森島康雄・伊賀高弘「椋ノ木遺跡平成7・8年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第81冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 森島康雄「椋ノ木遺跡平成9年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第85冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 藤井整・松尾史子「椋ノ木遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 河野一隆・近藤奈央「椋ノ木遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 森島康雄・石崎善久「椋ノ木遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第110冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004
- 高野陽子「椋ノ木遺跡第7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第115冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
- 村田和弘「椋ノ木遺跡第8次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第143冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
- 村田和弘・中川和哉「椋ノ木遺跡第9・10次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第151冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2012

付表2 椋ノ木遺跡出土土器一覧

報告 番号	器種	器形	地区	出土 地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整 (外面)	調整 (内面)	備 考
1	土師器	皿	b5	SK135	(7.6)	(1.3)	-	3/12	橙色 (7.5YR7/6)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	内面摩滅気味
2	土師器	皿	b5	SK135	(8.0)	(1.5)	-	3/12	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
3	土師器	皿	b5	SK135	8.2	1.6	-	完形	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや 粗	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
4	土師器	皿	b5 b6	SK135	8.3	1.35	-	10/12	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	外面にナデ上げ 痕
5	土師器	皿	b5	SK135	8.5	1.6	-	6/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや 粗	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	外面に付着物あ り
6	土師器	皿	b5	SK135	(8.8)	(1.5)	-	1/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや 密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
7	土師器	皿	b5	SK135	(9.0)	(1.9)	-	3/12	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	密	ナデ	ナデ	内面摩滅気味
8	土師器	皿	b5	SK135	(11.8)	(1.8)	-	1/12	黄灰色 (2.5Y5/1)	密	ナデ	ナデ	
9	土師器	皿	b5	SK135	(12.4)	(2.2)	-	2/12	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	やや 密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
10	土師器	皿	b5	SK135	(12.0)	(2.5)	-	2/12	浅黄橙色 (10YR8/3)	密	ナデ	ナデ	工具によるナデ
11	土師器	皿	b5	SK135	(14.4)	(1.5)	-	1/12	浅黄橙色 (10YR8/3)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
12	須恵器	杯蓋	a5 b5	SK135	(15.0)	(2.45)	-	1/12	外面：灰色 (N2/0) 内面： 灰色 (N6/0)	密	回転ナデ	回転ナデ	自然釉、沈線
13	瓦器	椀	b5 b6	SK135	(12.1)	(3.3)	-	3/12	外面：暗灰色 (N3/0) 内面： 灰色 (N6/0)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ、ミガキ	大和型
14	土師器	羽釜	b5	SK135	(23.4)	(4.9)	-	1/12	灰色 (N4/0)	密	ナデ	ナデ	
15	土師器	羽釜	b5	SK135	(15.2)	(1.4)	-	1/12	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	やや 粗	ナデ	ナデ	大和型
16	土師器	羽釜	b5	SK135	(32.9)	(8.15)	-	3/12	外面：明褐灰 色 (7.5YR7/2) 内面：明褐灰 色 (7.5YR7/1)	やや 粗	タタキ、ナデ	タタキ、ナデ	大和型 内外面煤付着
17	青磁	椀	b5	SK135	(13.0)	(4.8)	-	1/12	施釉部分：緑 灰色 素地：灰色 (N8/0)	精良	-	-	龍泉窯 鎬蓮弁文
18	白磁	椀	b5	SK135	(15.8)	(2.5)	-	1/12	淡灰白オリ ープ色	密	-	-	
20	土師器	皿	b6	SX153	8.6	1.6	-	完形	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
21	土師器	皿	b6	SX153	(8.4)	(1.5)	-	1/12	暗灰色 (N3/0)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
22	土師器	皿	b6	SX153	(11.1)	(1.7)	-	1/12	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
23	須恵器	杯身	b6	SX153	(9.4)	(3.5)	-	-	灰色 (N6/0)	やや 粗	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	
24	土師器	羽釜	a6 b6	SX153 北半	(20.6)	(4.4)	-	1/12	浅黄橙色 (10YR8/3)	やや 粗	ナデ	ケズリ、ナデ	大和型 外面煤付着
25	灰釉 陶器	壺	a6 b6	SX153	(13.3)	(5.9)	-	5/12	灰白 (5Y7/1)	密	回転ケズリ、回 転ナデ、ナデ	回転ナデ	
26	瓦質 土器	ミニチ ユア羽 釜	b6	SX153	(4.5)	(3.7)	-	3/12	外面：灰色 (N4/0) 内面：灰白色 (N7/0)	密	ナデ	ナデ	三足 付着物
27	瓦質 土器	ミニチ ユア羽 釜	b6	SX153	(6.4)	(2.4)	-	4/12	灰色 (N4/0)	密	ナデ	ナデ	三足 付着物
28	須恵器	鉢	b6	SX153	27.7	(3.1)	-	1/12	灰色 (N5/0)	やや 粗	回転ナデ	回転ナデ	東播系
29	須恵器	鉢	a6	SX153	(31.0)	(4.1)	-	1/12	灰色 (N6/0)	やや 密	回転ナデ	回転ナデ	東播系 外面に重ね焼き 痕
30	白磁	椀	b6	SX153	-	(2.5)	(4.0~ 4.8)	6/12	明淡青灰色	密	-	-	
31	白磁	椀	b6	SX153	-	(2.8)	(5.9~ 6.5)	2/12	淡黄灰色	密	-	-	

報告番号	器種	器形	地区	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
32	青磁	椀	a6 b6	SX153	-	(2.0)	4.0~ 4.6		明淡緑灰色	密	-	-	龍泉窯 鎗蓮弁文
33	瓦器	椀	a6 b6	SX153	9.8	3.4	-	6/12	灰色 (N6/0)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ、ミガキ	渦巻状暗文 大和型
34	瓦器	椀	b6 b9	SX153	9.8	3.4	-	7/12	灰色 (N5/0) ~灰白色 (N8/0)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ、ミガキ	渦巻状暗文 大和型
35	瓦器	椀	a6 b6	SX153	13.1	4.5	-	4/12	灰色 (N4/0)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ、ミガキ	螺旋状暗文 大和型
39	瓦器	椀	b5	SK144	13.8~ 14	4.4	-	完形	灰色 (N4/0)	密	ナデ、ユビオサ エ、ミガキ	ナデ、ミガキ	螺旋状暗文 大和型
40	土師器	皿	d1 d2	SK002	(8.4)	1.4	-	5/12	にぶい黄橙色 (7.5YR7/4)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
41	土師器	皿	a6 d7	SK054	(12.0)	(1.6)	-	2/12	にぶい黄橙色 (7.5YR7/4)	密	ナデ	ナデ	
42	土師器	皿	b4	SK146	8.7	1.4	-	完形	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
43	土師器	皿	b4	SK146	8.8	1.5	-	完形	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
44	土師器	皿	b6	SK195	8.8	1.5	-	完形	橙色 (7.5YR7/6)	密	ナデ	ナデ	摩滅
45	土師器	皿	b6	SK195	8.8	1.9	-	完形	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	密	ナデ	ナデ	外面摩滅
46	土師器	皿	b6	SK195	9.1	1.6	-	11/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	密	ナデ	ナデ	
47	土師器	皿	b6	SK195	9.2	1.6	-	完形	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	密	ナデ	ナデ	摩滅
48	土師器	皿	b6	SK195	9.0	1.6	-	完形	浅黄橙色 (10YR8/4)	密	ナデ	ナデ	摩滅
49	土師器	皿	b6	SK195	9.1	1.8	-	完形	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	密	ナデ	ナデ	摩滅
50	土師器	皿	b6	SK195	8.8	1.8	-	ほぼ完 形	浅黄橙色 (10YR8/3)	密	ナデ	ナデ	摩滅
51	土師器	皿	b6	SK195	8.7	1.8	-	完形	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	密	ナデ	ナデ	摩滅
52	土師器	皿	b6	SK195	9.2	1.6	-	9/12	浅黄色 (2.5Y7/4)	密	ナデ	ナデ	内面摩滅
53	土師器	皿	b6	SK195	9.1	1.7	-	10/12	浅黄橙色 (10YR8/4)	密	ナデ	ナデ	
54	土師器	皿	b6	SK195	9.0	1.8	-	1/12	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	密	ナデ、ユビオサ エ	不明瞭	内面摩滅、口縁 の歪み著しい、 粘土紐接合痕あり
55	土師器	皿	b6	SK195	9.1	1.7	-	完形	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	密	ナデ、ユビオサ エ	不明瞭	内面摩滅
56	土師器	皿	b6	SK195	8.8	1.8	-	完形	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	密	ナデ、ユビオサ エ	不明瞭	内面摩滅
57	土師器	皿	b6	SK195	9.0	1.9	-	1/12	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
58	土師器	皿	b6	SK195	9.2	1.7	-	10/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
59	土師器	皿	b6	SK201	(8.0)	2.1	-	2/12	灰黄色 (2.5Y6/2)	密	ナデ	ナデ	外面摩滅
60	土師器	皿	b6	SK201	(9.2)	1.8	-	5/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	密	ナデ	ナデ	
61	土師器	皿	b6	SK201	9.2	1.8	-	6/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
62	土師器	皿	b6	SK201	9.3	2	-	8/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや 密	ナデ	ナデ	
63	土師器	皿	b6	SK201	9.3	2	-	6/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	密	ナデ	ナデ	
64	土師器	皿	b6	SK201	9.2	3	-	ほぼ完 形	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
65	土師器	皿	b6	SK201	(9.4)	1.9	-	5/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	密	ナデ	ナデ	
66	土師器	皿	b6	SK201	(9.8)	1.7	-	3/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	密	ナデ、ユビオサ エ	ナデ	
67	土師器	皿	b6	SK201	(10.0)	1.9	-	4/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	密	ナデ	ナデ	
68	土師器	皿	b6	SK201	9.7	2.0	-	11/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや 密	ナデ	ナデ	摩滅気味

椋ノ木遺跡第11次発掘調査報告

報告番号	器種	器形	地区	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
69	土師器	皿	b7	SK208	9	1.7	-	完形	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	密	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
70	土師器	皿	b6 b7	SK209	9.4	1.9	-	8/12	浅黄橙色 (10YR8/4)	密	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
71	土師器	皿	b6 b7	SK209	9.4	1.8	-	9/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	密	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
72	土師器	皿	b6 b7	SK209	9.5	1.7	-	8/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	密	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
73	土師器	皿	b6 b7	SK209	9.4	1.9	-	10/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	密	ナデ	ナデ	
74	土師器	皿	b6	SD110	9.2	1.8	-	12/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
75	土師器	皿	b6	SD110	9.0	1.7	-	12/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
76	土師器	皿	b6	SD110	8.8	1.7	-	12/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
77	土師器	皿	b6	SD110	9 ~ 9.4	1.8	-	12/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
78	土師器	皿	b6	SD110	9.2	1.7	-	12/12	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
79	土師器	皿	b6	SD110	9 ~ 9.2	1.8	-	12/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
80	土師器	皿	b6	SD110	9.4	1.9	-	10/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	内面摩滅気味
81	土師器	皿	b6	SD110	9 ~ 9.2	1.8	-	完形	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	工具痕あり
82	土師器	皿	b6	SD110	9 ~ 9.2	1.8	-	完形	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	内面摩滅気味
83	土師器	皿	b6	SD110	9.4	1.8	-	完形	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	やや粗	ナデ	ナデ	内面摩滅気味 工具痕あり
84	土師器	皿	b6	SD110	9.4	1.7	-	11/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	内面摩滅気味 工具痕あり
85	土師器	皿	b6	SD110	8.8 ~ 9	2.0	-	11/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
86	土師器	皿	b7	SD110	9.2	1.9	-	6/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	やや粗	ナデ、ユビオサエ		内面摩滅気味
87	土師器	皿	b7	SD110	9.1	2	-	9/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
88	土師器	皿	b6	SD110	9.1 ~ 9.3	1.9	-	完形	外面：にぶい橙～にぶい褐色 (7.5YR7/4 ~ 6/4) にぶい赤褐色 (10R7/4) 内面：にぶい橙色 (7.5YR7/4)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	全体に摩滅気味
89	土師器	皿	b6	SD110	8.8	1.8	-	完形	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ	全体に摩滅気味
90	土師器	皿	b6 b7	SD110	9.2	1.8	-	11/12	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	密	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
91	土師器	皿	b6 b7	SD110	9.6	(1.4)	-	3/12	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	密	ナデ、ユビオサエ	ナデ	内面摩滅著しい
92	土師器	皿	b7	SD110	14.5	2.8	-	7/12	外面：にぶい橙色 (7.5YR7/4) 内面：にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや粗	ナデ	ナデ	外面摩滅の為調整不明瞭
93	瓦器	椀	b5	SK180	15.2	4.8	-	2/12	暗灰色 (N3/0)	密	ナデ、ユビオサエ	ナデ、ミガキ	螺旋状暗文大和型
94	瓦器	皿	b5	SK180	8.8 ~ 9.2	1.8	-	完形	灰色 (N7/0)	密	ナデ、ユビオサエ	ナデ	
95	瓦質土器	浅鉢	b5	SK180	(38)	(8.9)	-	1/12	外面：灰白 (5Y7/1) 内面：灰白 (N7/0 ~ 8/0)	密	ナデ、ミガキ、ケズリ、ヘラ状工具によるナデ	ミガキ	
96	土師器	皿	b5	SK180	(14.2)	2.6	-	2/12	灰白色 (10YR8/2)	密	ナデ、ユビオサエ	ナデ	

報告番号	器種	器形	地区	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
97	白磁	椀	b5	SK180	(16.0)	(5.2)	-	1/12	施釉部分灰白色 (5Y7/2) 素地灰白色 (5Y7/1)	精良	-	-	内面沈線あり
98	白磁	椀	b5	SK180	14.2	(3.2)	-	2/12	施釉部分灰白色 (5Y7/1) 素地灰白色 (N8/0)	精良	-	-	
99	白磁	椀	b5	SK180	(14)	(3.7)	-	2/12	灰白 (2.5GY8/1)	精良	-	-	
100	白磁	椀	b5	SK180		(2.2)	(5.6)	3/12	灰白 (7.5GY7/11)	精良	-	-	
101	土師器	皿	b6	SD139	(8.8)	(1.25)	-	3/12	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	密	ケズリ、ナデ	ナデ	
102	土師器	羽釜	b6	SD139	(17.6)	(3.7)	-	2/12	外面：浅黄橙色 (7.5YR8/3) 断面：黒色 N2/0	やや粗	ナデ	タタキ、ナデ	大和型 外面煤付着
103	土師器	羽釜	b2 c2	SK182	(30.7)	(12.5)	-	4/12	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	やや密	ナデ、ユビオサエ	ハケ、ヘラ状工具、 ナデ	大和型 口縁部 外面煤付着
104	土師器	羽釜	b2 c2	SK182	(30.4)	(23.5)	-	3/12	灰褐色 (5YR4/2)	やや粗	ナデ	タタキ、ナデ	大和型 煤付着
105	土師器	羽釜	a5 b5	SP133	(28.0)	(11.9)	-	2/12	橙色 (5YR7/6)	やや粗	ナデ、ユビオサエ	ナデ、ユビオサエ	煤付着
106	瓦質土器	鍋	b6	SP210	(24.6)	(5.1)	-	2/12	灰色 (N4/0) ～灰白色 (N8/0)	密	ナデ、ユビオサエ、 タタキ	ナデ、ヘラナデ	
107	土師器	羽釜	c2	SK242	(18.5)	(6.2)	-	3/12	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	やや密	ナデ	ナデ	大和型
108	土師器	羽釜	c2	SK242	(29.4)	(8.4)	-	1/12	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	密	ナデ、ユビオサエ	ナデ	煤付着
111	縄文土器	不明	c3・4 d3・4 e3	包含層	-	-	-	/	外面：にぶい褐色 (7.5YR6/3) 内面：褐灰色 (7.5YR5/1)	粗	ケズリ	ケズリ	
112	縄文土器	不明	c3・4 d3・4 e3	包含層	-	-	-	/	内外面：褐灰色 10YR5/1 断面：にぶい黄橙色 (10YR7/2)	粗	ケズリ	ケズリ	
113	縄文土器	不明	e2	SX410	-	-	-	/	内外面：明赤褐色 (5YR5/6) 断面：暗褐色 (7.5YR3/3)	粗	ナデ	不明	口縁端部片

- ・ 数字は小数点第2位を四捨五入、第1位で表示
- ・ 残存率：口径の残存率で、底部片の場合は底径の残存率。破片等の場合、分母を「12」とし、約分はしていない。
- ・ 法 量：- は該当する部位が存在しないもの、() は残存高、/ は計測不能。

圖 版



(1) 1 トレンチ全景 (空撮、上が東)



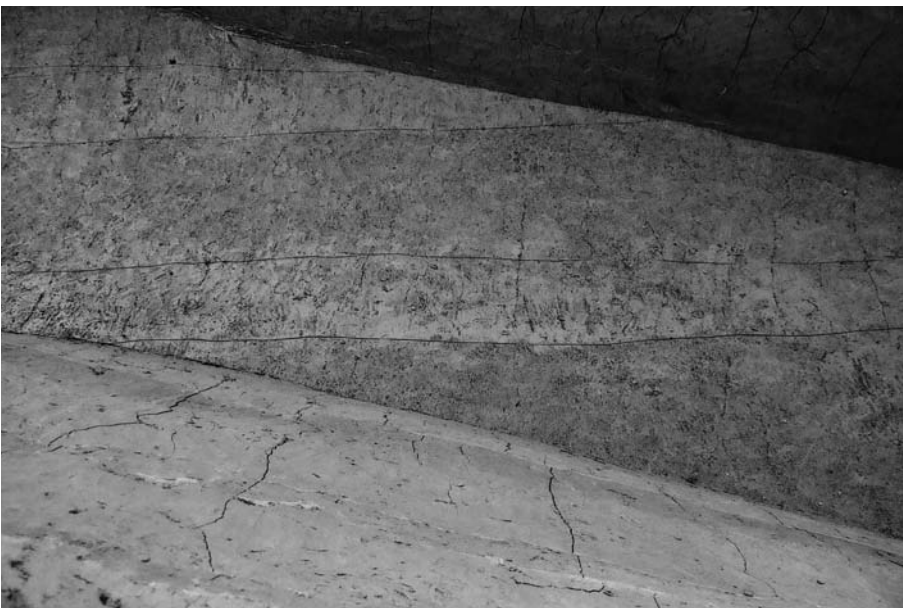
(2) 2 トレンチ全景 (空撮、北から)



(1) 1 トレンチ調査前(南から)



(2) 1 トレンチ作業状況(南から)



(3) 1 トレンチサブトレンチ
溝状痕跡検出状況(東から)

(1) 1 トレンチ溝状痕跡 7・8
アゼ断面(南から)



(2) 1 トレンチ溝状痕跡 9・10
アゼ断面(南から)



(3) 1 トレンチ溝状痕跡北部
(東から)





(1) 1 トレンチ溝状痕跡
中央部(東から)



(2) 1 トレンチ溝状痕跡南部
(東から)



(3) 1 トレンチ溝状痕跡南端
(東から)

(1) 1 トレンチ溝状痕跡南端
(南から)



(2) 1 トレンチ溝状痕跡全景
(南から)

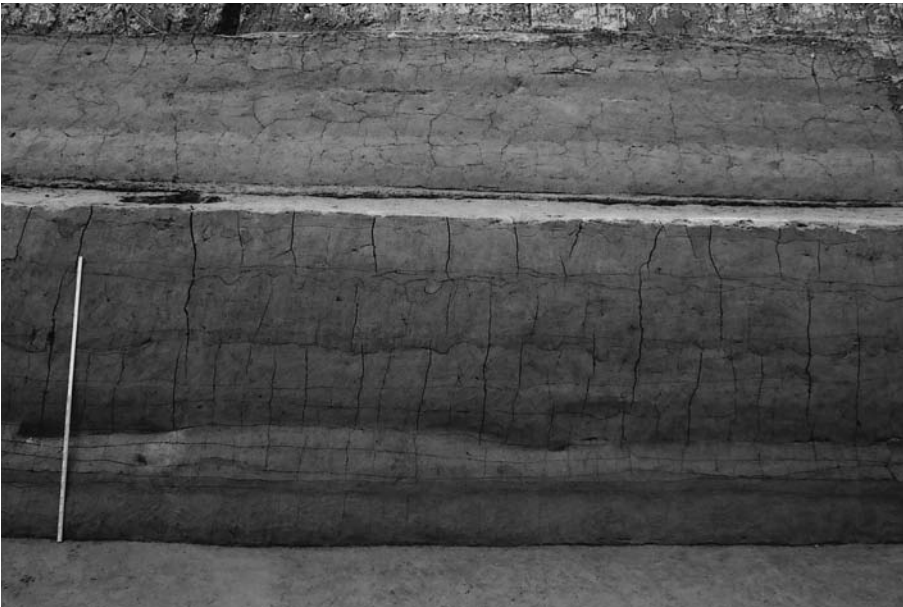


(3) 1 トレンチ溝状痕跡全景
(北から)





(1) 1 トレンチ西壁断面(東から)



(2) 1 トレンチ西壁断面下層
(東から)



(3) 1 トレンチ最下層掘削状況全景
(南から)



(1) 1 トレンチ最下層掘削状況全景
(北から)



(2) 1 トレンチ北東部サブトレンチ
断面(南から)



(3) 2 トレンチ作業状況(南から)



(1) 2トレンチ全景(北から)



(2) 2トレンチ全景(南から)



(3) 2トレンチ東壁断面北部
(西から)

(1) 2 トレンチ東壁断面中央部
(西から)

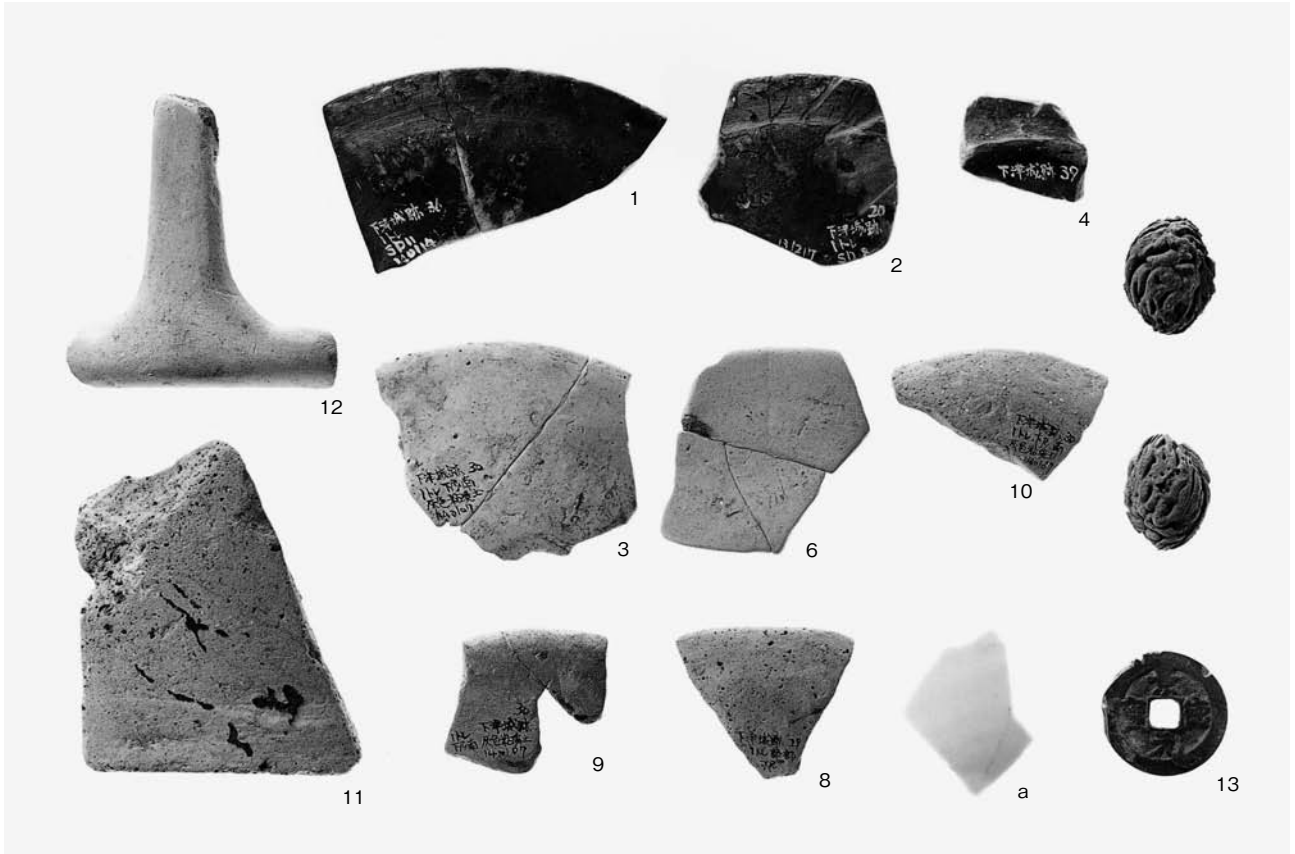


(2) 2 トレンチ東壁断面南部
(西から)

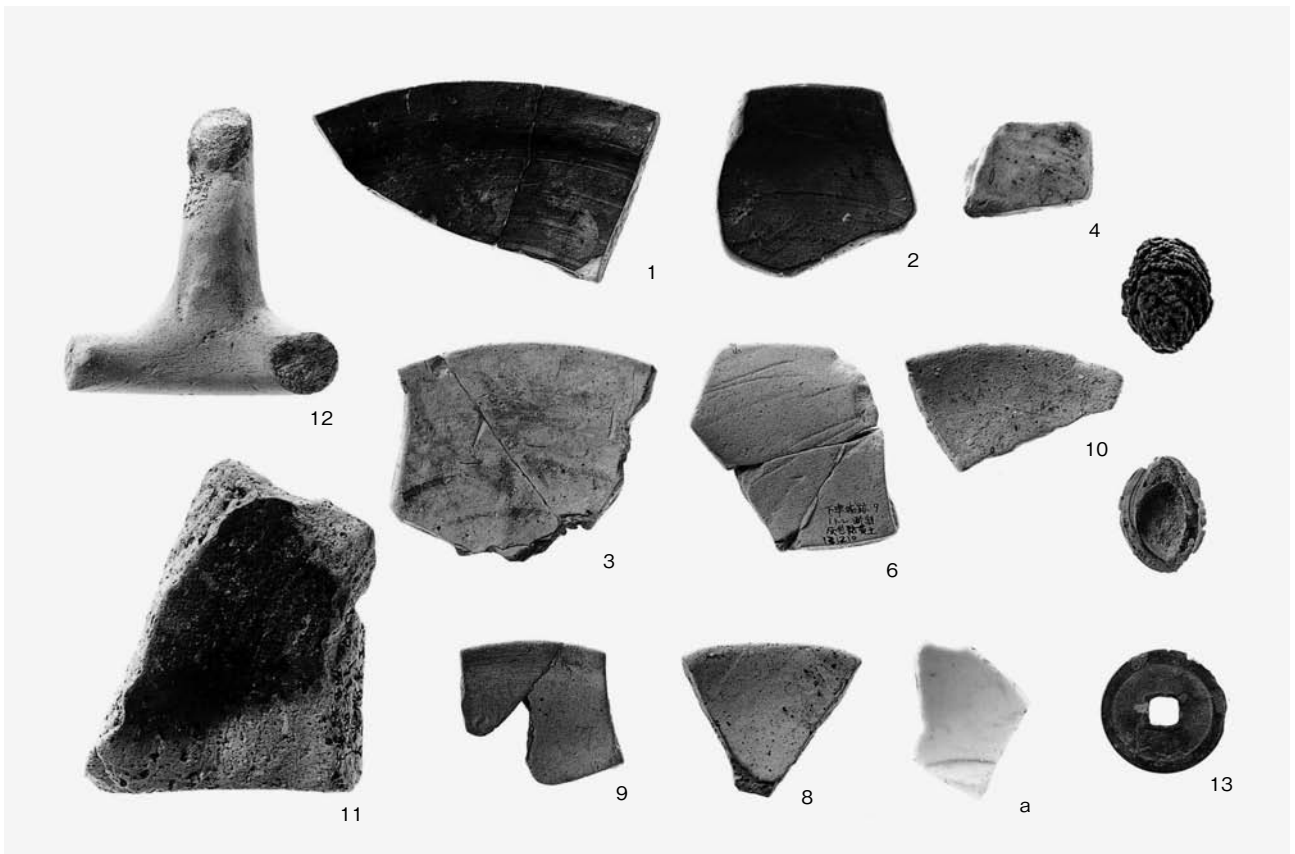


(3) 2 トレンチ南壁断面(北から)





(1) 出土遺物(外面・表)



(2) 出土遺物(内面・裏)

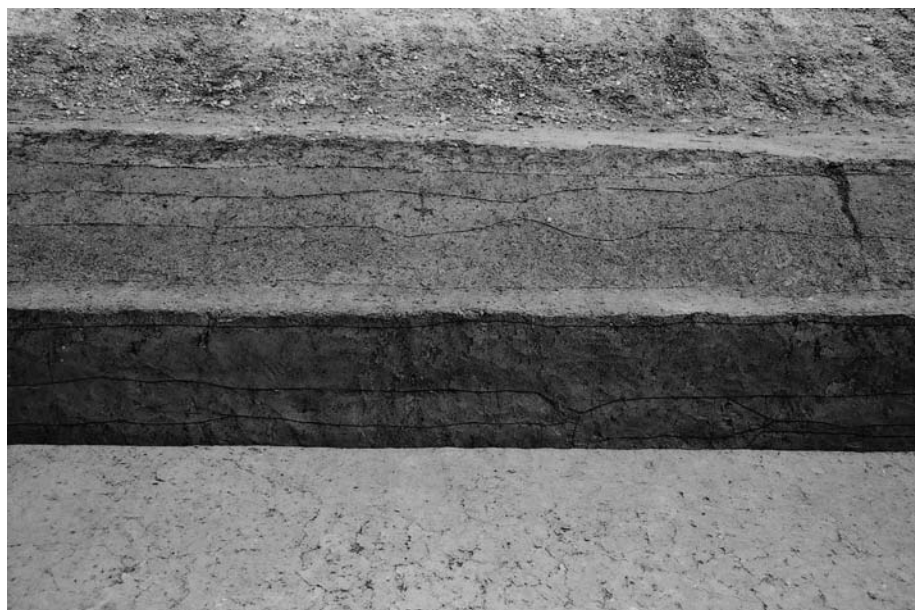
(1) 調査前(西から)



(2) 第 1 面検出状況(南西から)



(3) 南壁土層断面(北から)





(1) 土坑 S K135・礫敷き S X153
検出状況(南から)



(2) 礫敷き S X153全景(南から)



(3) 礫敷き S X153完掘状況
(南から)

(1) 溝 S D 110 遺物出土状況
(南から)



(2) 土坑 S K 195 遺物出土状況
(南東から)



(3) 土坑 S K 201 遺物出土状況
(東から)





(1) 土坑 S K 209 遺物出土状況
(南から)



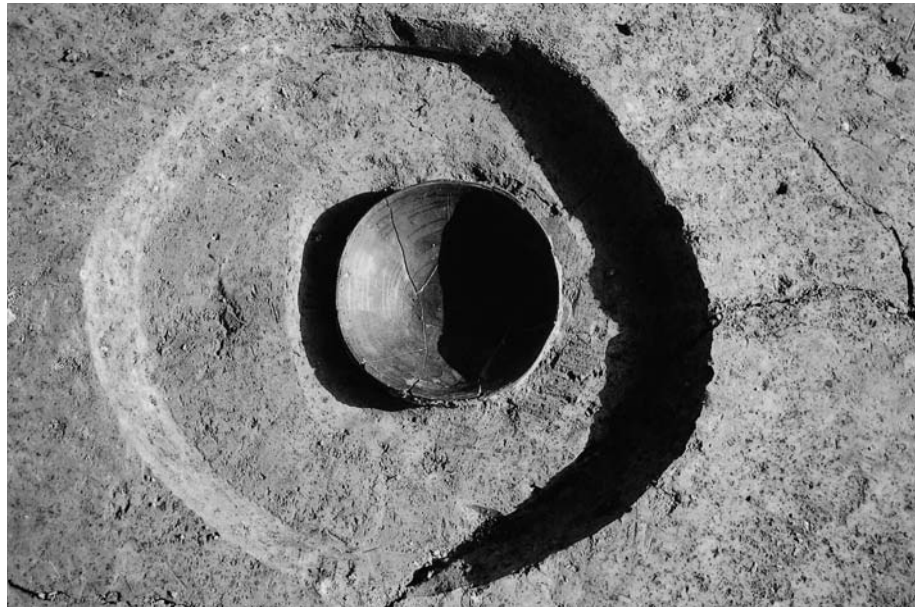
(2) 土坑 S K 146 遺物出土状況
(東から)



(3) 土坑 S X 030 半截状況
(南から)



(1) 土坑 S K 144・145 遺物出土状況
(西から)



(2) 土坑 S K 144 下層遺物出土状況
(西から)



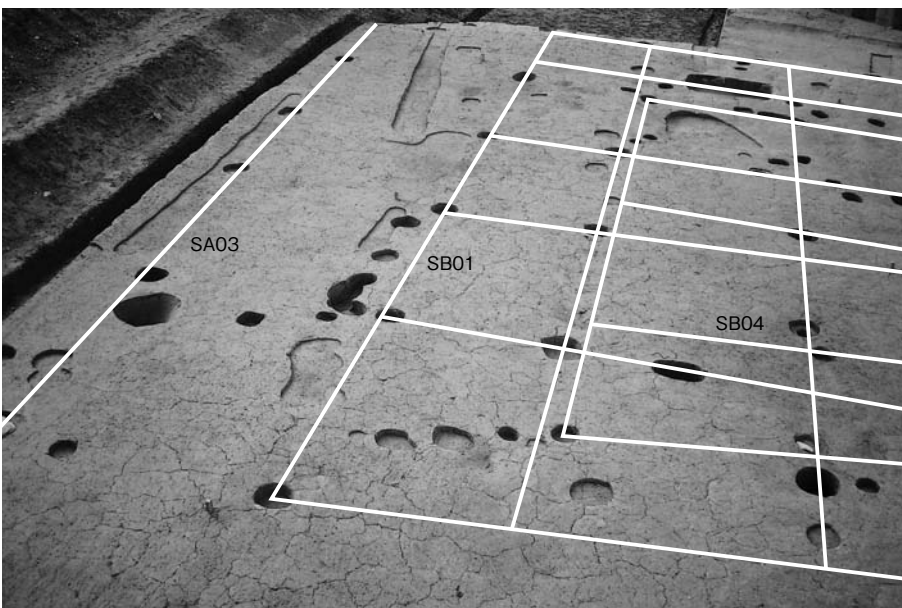
(3) 土坑 S K 182 遺物出土状況
(東から)



(1) 掘立柱建物 S B01 検出状況
(東から)



(2) 掘立柱建物 S B02 検出状況
(東から)



(3) 柵 S A03、掘立柱建物 S B01・
04 検出状況 (東から)



(1) 掘立柱建物 S B 01 柱穴 S P 052 半截状況(南から)



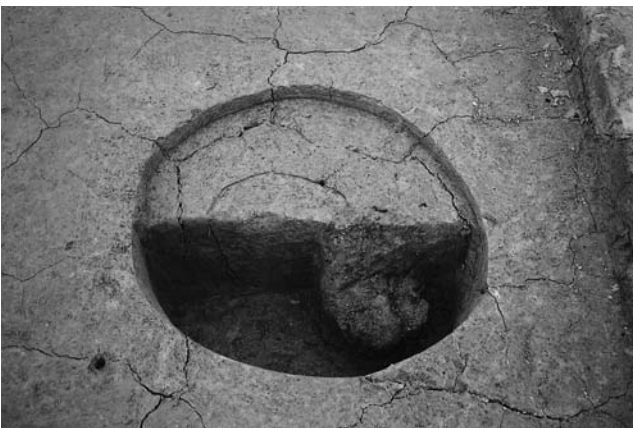
(2) 掘立柱建物 S B 01 柱穴 S P 077 半截状況(南から)



(3) 掘立柱建物 S B 01 柱穴 S P 157 半截状況(南から)



(4) 掘立柱建物 S B 01 柱穴 S P 168 半截状況(南から)



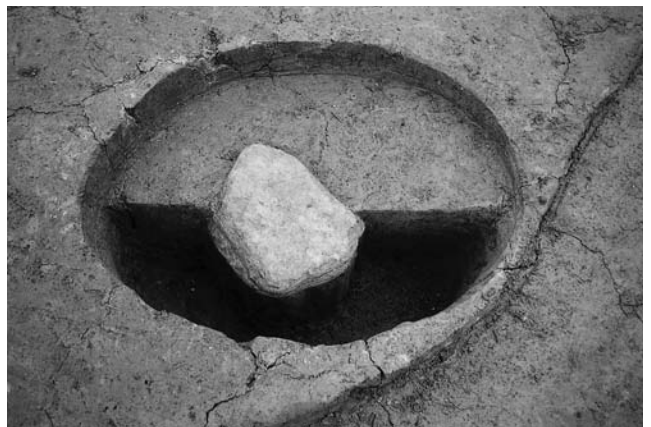
(5) 掘立柱建物 S B 02 柱穴 S P 202 半截状況(南から)



(6) 柵 S A 03 柱穴 S P 033 半截状況(南から)



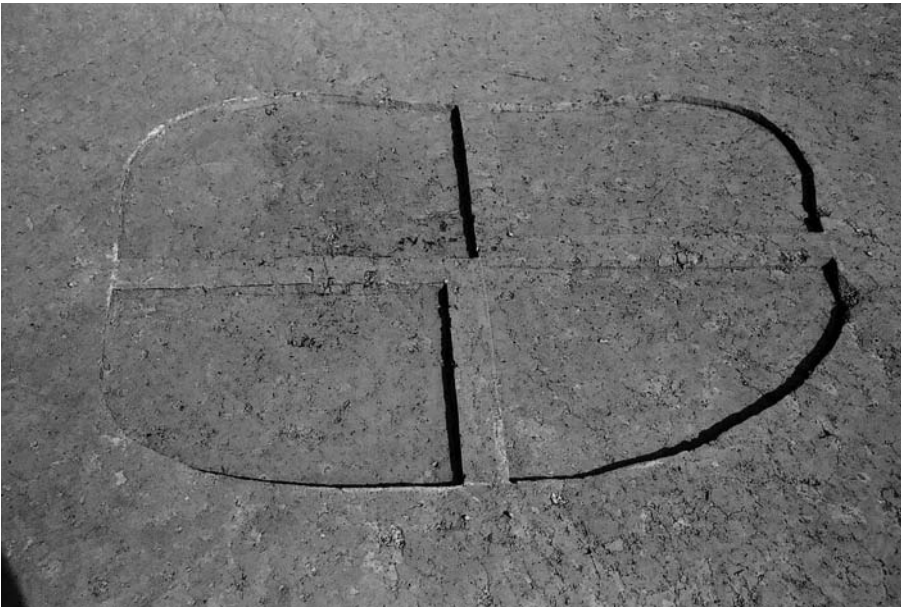
(7) 柵 S A 03 柱穴 S P 082 半截状況(南から)



(8) 柵 S A 03 柱穴 S P 124 半截状況(南から)



(1) 第 2 面土坑 S K 300 検出状況 (南東から)



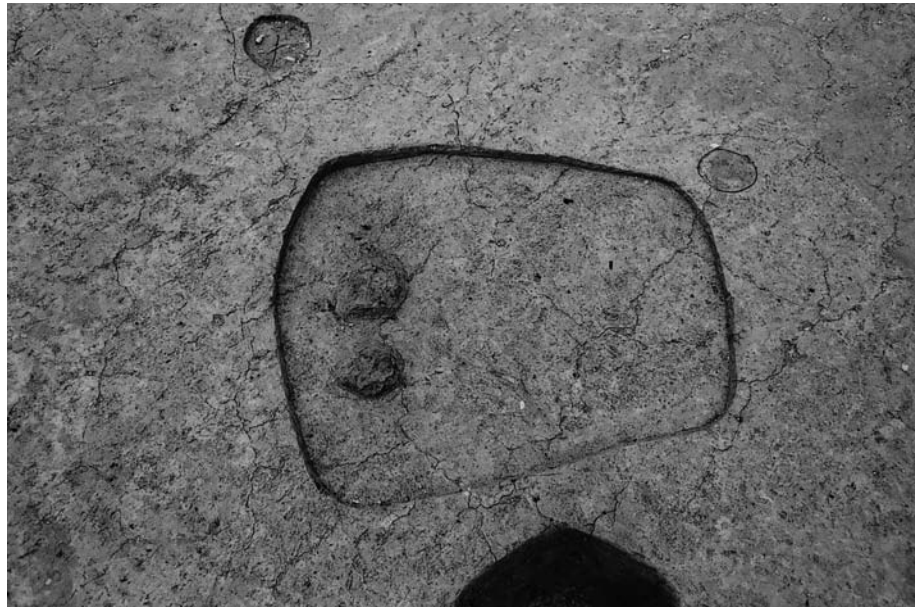
(2) 第 2 面土坑 S K 310 検出状況 (南西から)



(3) 第 2 面全景 (南西から)



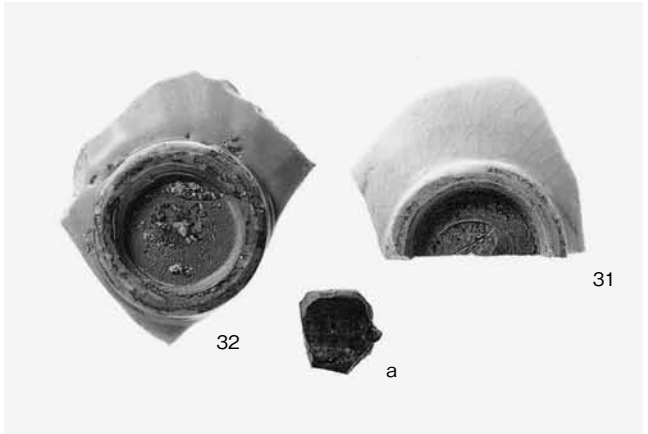
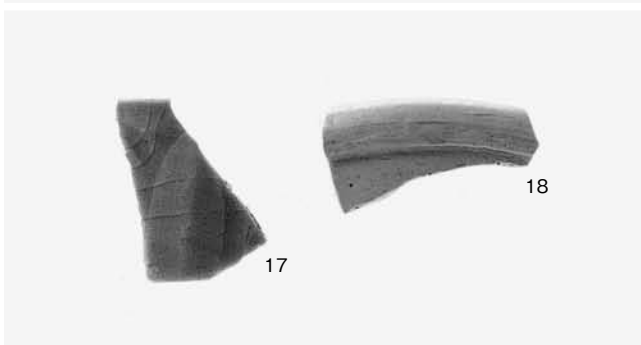
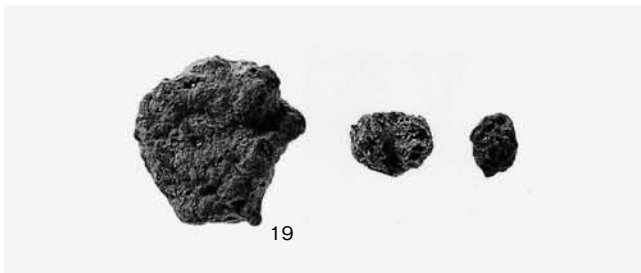
(1) 第 3 面土坑 S K 400(東から)

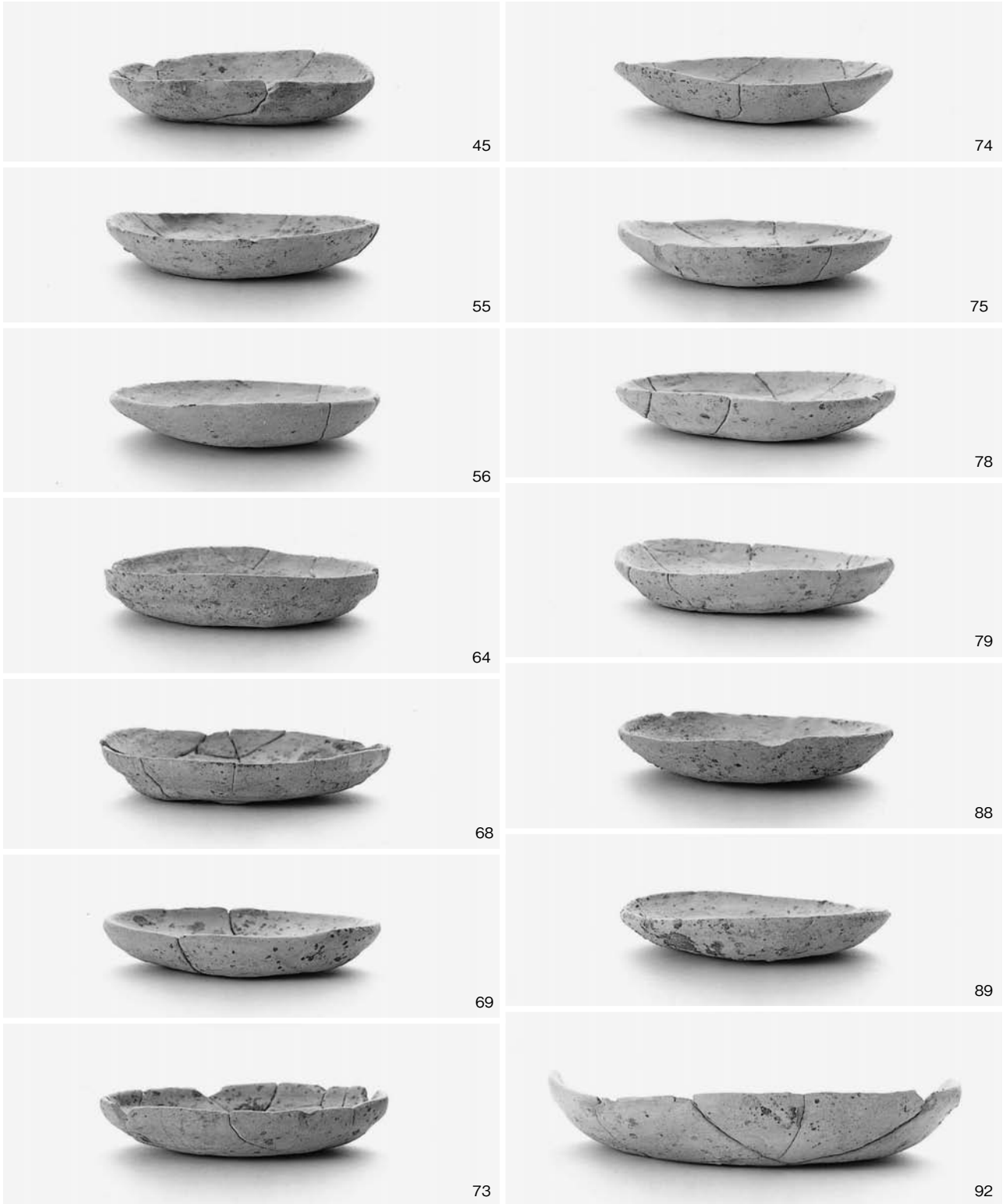


(2) 第 3 面土坑 S K 401(東から)

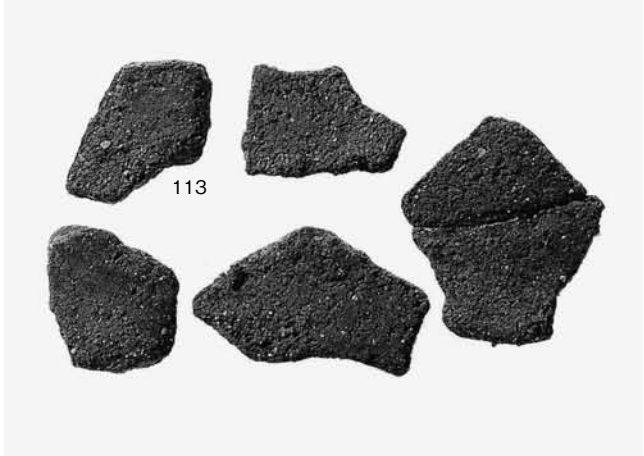
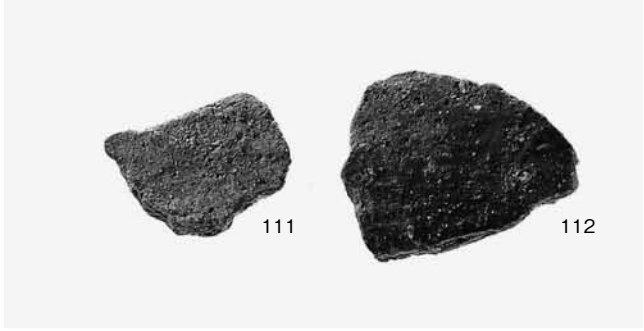
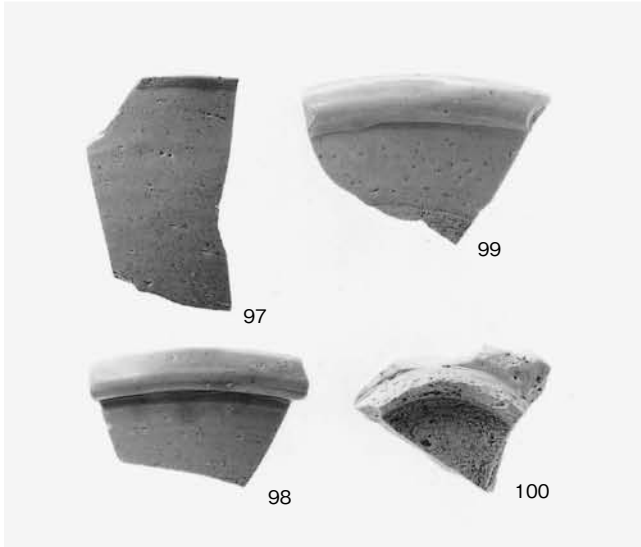


(3) 第 3 面全景(南西から)





出土遺物 2



報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第162冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第162冊
編著者名	石尾政信・村田和弘・中川和哉・岩松保・松尾史子
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番03 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2015年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
ながおかきょうあとさきょう・しもつじょうあと	きょうとふきょうとしふしみくよどおおしもつちょう	26109	3 1203	34° 54' 28"	135° 42' 31"	20131016 ～ 20140318	500	建物建設
長岡京跡左京第565次・下津城跡	京都府京都市伏見区淀大下津町							
むくのきいせき	きょうとふそうらくぐんせいかちょうおおあざしもこまこあざむくのき	26366	46	34° 46' 28"	135° 47' 58"	20131106 ～ 20140304	620	建物建設
棕ノ木遺跡第11次	京都府相楽郡精華町大字下狛小字棕ノ木ほか							

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡左京第565次・下津城跡	城跡	中世以降	－	土師器・瓦器・瓦・土製品・銭貨	溝状痕跡
椋ノ木遺跡第11次	集落	縄文 古墳 平安～鎌倉	土坑・ピット 土坑・ピット 礫敷き・掘立柱建物・柵・土坑・溝	縄文土器(晩期)・石鏃 須恵器 土師器・瓦器・青磁・白磁・瓦質土器・瓦・温石・銭貨・鉄滓	

所収遺跡名	要 約
長岡京跡左京第565次・下津城跡	<p>今回の調査では、下津城に関連する顕著な遺構・遺物は確認されなかったが、土層の観察により、調査地付近は少なくとも弥生時代後期から古墳時代前期以降近代にいたるまで、小畑川と東側の桂川に挟まれた遊水地として機能しており、大量の砂質土・粘質土などが繰り返し堆積したことがわかる貴重な調査成果を得ることができた。</p>
椋ノ木遺跡第11次	<p>今回の調査では、縄文時代・古墳時代・平安時代末から鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。縄文時代・古墳時代については、遺物量と遺構の密度から生活域から離れていたと考えられる。</p> <p>平安時代末から鎌倉時代については、大型の掘立柱建物や柵が見つかり、鍛冶関連の遺物が出土した。南側の第8次調査の成果と合わせると、12世紀後半から13世紀初めまで南側を柵で区画された小規模な建物が2棟並列しており、13世紀中ごろに区画する柵がなくなり、大型建物を中心に鍛冶関連の遺構が点在する工房域として利用されていることが明らかになった。</p> <p>周辺条里地割に見られる1坪の北辺1遇ではあるが、中世の土地利用変遷を想定することができる貴重な調査例となった。</p>

京都府遺跡調査報告集 第162冊

平成27年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141